

第二次スパロボZ ルルーシュに生まれ変わった転生者（更新停止中）

幻龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

多次元世紀20年。

これは様々な世界が次元震で融合した世界のルルーシュ・ヴィ・ブリタニアのIFの物語。

この作品は作者の趣味で書いた御都合作品で深い考察等をしないことがほとんどです。

ルルーシュはチート等、キャラ設定や世界観も無茶苦茶なところもあります。更新も不定期です。

# 目次

プロローグ	1
番外編	5
第一話 特派	8
第二話 待機命令	14
第三話 出撃と交渉	18
第四話	24
第五話 ナリタ戦	29
第六話	35
第七話	41
第八話	45
第九話 河口湖事件 前篇	50
第十話 河口湖事件 後篇	55
第十一話	60
第十二話	65
第十三話 ユーロピア攻略作戦始動	70
第十四話 ユーロピアン戦争終結	75
第十五話 交渉	80
第十六話 異世界進出計画?	85
第十七話 エネルギーテロ発生	91
第十八話 蹂躪する乙	97
第十九話 地球連邦本部での一幕	101

## プロローグ

「ルルーシュ会長！ MSの注文が来ました。量産型を30体とパーツを3ヶ月以内に納品をお願いしたいと！」

「今は注文が立て込んでいます。納期が少し遅くなると伝えて置け！」

「はっ！」

日本(第二次スパロボZでは日本は二つあり、北西に位置する方)東京。ここに会社兼工廠を構え、ティツシュからMSに至るまで製造、販売をしている世界第三位に入る大財閥、アクアヴィット社は本日も大忙しだった。

特に会長である、ブリタニア・ユニオン第十七皇位継承者、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは久し振りに軍の仕事から解放されて会社の自室で書類を捌いていた。

ちなみに会長と呼ぶのはルルーシュが会社の中まで殿下と呼ばれるのを嫌った為だ。最も状況によっては殿下と呼ばせている。

「本日も大盛況ですね、ルルーシュ殿下。仕事をしているときの魅力は普段の二割増しですね」

「モニカ。それはこの前買物に付き合えなかったことへの当てつけか？」

「いいえ。ただ、私としては、休日の私的な時間ぐらい付き合っほしいなと思っただけです」

「……今度埋め合わせする」

ルルーシュに書類を持ってきた綺麗な金髪を腰の長さまで伸ばし、芸術のような美しい容姿をしている女性、そして、自分の騎士でもあるモニカ・クルシエフスキーの言葉に突っ込みを入れた。

ルルーシュはティツシュからMSに至るまで製造、販売をしている世界第三位に入るアクアヴィット大財閥を転生した時に手に入れたオリジン・ローを操る力を使い、色んな異世界から技術や知識等を会得しそれらを利用して築き上げることに成功し、自らの後ろ盾を作った。その為仕事量は半端ではない。ちなみに本人は皇族としての仕

事だけではなく、技術屋兼MSパイロットもしている。

しかし、モニカが買物に出かけることを楽しみにしていたことに気が付き、内心謝罪した。モニカが自分に忠誠以上の感情を抱いていることは長年の付き合いで何となく理解しているからだ。最も自覚しているかどうか別であるが。

ルルーシユから約束を取り付けたモニカ本人はというと、内心で小躍りするほど喜び、あれこれと計画を頭の中で考えていたのであった。

「これで終わりだ。俺はすでに書類仕事からは解放されているはずなのにな。今度社長をや監査役を注意しておくか。奴らの給料は高いのだからな」

「御最もですね。私の方から伝えておきますね」

「任せたぞ。俺は自分専用機を試運転がてら移動させにいく。お前も来い」

「イエス・ユア・ハインス」

日本の富士山郊外近辺。

この多次元世界には日本は二つ存在するので当然富士山も二つ存在する。南東の日本はブリタニア世界から転移してきた日本で今はエリアーとしてブリタニアが支配していて、サクラダイトの採掘現場になっている。もう一方の日本の富士山には光子力エネルギーの元になるジャパニウム鉱石が存在し、それからとれる光子力エネルギーを研究する研究所が存在していた。

ルルーシユは一時、光子力エネルギーに興味を持ちそれを利用する為に資金提供を餌に技術協力を要請したことがあった。しかし、キナ臭い思惑を感じ取ったのか、光子力研究所は平和利用の為に研究しているものであって兵器を造るために研究をしているわけではないと言っている、断った経緯があった。

無論平和目的で開発するためと言って、何度か交渉を重ねたが話は平行線となったので、めんどくさいと思ったルルーシユが研究所を設立して勝手に研究を始めたのだが、未知のエネルギーなので手探りで

研究するしかなくなかなか進まず、結果、研究所は本来の目的を破棄して、極秘で最新鋭の兵器の製造と試運転の訓練を行う場所になってしまったのだった。

「殿下。すでに言われた通りにデータは全て移動させて、消去しました。移転準備はほぼ完了しました」

「そうか。では予定通りG兵器を移動させる。総員は退避しろ。それと周囲に人がいないか確認しておけ」

「はあ……。職員の退避はすんでいますますが、人がいないことを確認しろとは？」

ルルーシュが鋭く冷たい目で見ているのに気づき、研究所の所長は慌てて口を噤んだ。

彼はブリタニア皇帝直属騎士である、ナイトオブワンが直々に皇族教育を施した人物だ。おまけに皇籍を剥奪されながら実力でそれを取り戻したという凄腕皇子。

鋭い視線を向けられるだけで、家の権力に縋って威張り散らしている皇族や貴族とは格が違うのだということを、改めて肌で感じさせられたのか、反論を呑み込んで所長はすぐに部下の職員にその旨を命じた。

数分後、周囲に人影及び産業スパイ等はいないと確認が取れ、それぞれの機体を起動させた。

「モニカ。外に出たらありったけの火力を叩きつけて、基地を破壊する。すでに周囲には特殊な実験を行うと伝えてあるから問題ない。それに万が一目撃した場合はどうなるかわからないと政府を脅してあるから住民が来ることはない」

「イエス・ユア・ハイネス」

ルルーシュとモニカはアヴェイン・イージスとエレイン・ストライク両機体を飛翔させ、先に外で待機していた、マユ・アスカとステラ・ルルーシュと合流した。

「ルルーシュ様。マユはすでに準備万端です」

「ステラも準備できています」

「私も問題ありません」

二人はすでに準備万端でいつでも命令を実行できるようにしていた。

モニカもすでに準備を整えていた。ルルーシユはさすがラウンズクラスの実力の持ち主だと感嘆し、いい騎士を持ったと思いい、笑顔が出ていた。

「よし。全火力を持って研究所を破壊する。攻撃開始だ！」

「「イエス・ユア・ハynes！」」

合図と共に四機は全火力を研究所に叩きつけた。その攻撃は2分程続き、研究の為に頑丈に作ったことが仇になったのか完全破壊はできなかったものの、再び使用することができないくらいは破壊できたので、それでよしとルルーシユが判断したので、予め用意していた空中戦艦に全機を收容したあと、ミラージユコロイドと光学迷彩を展開し、ブリタニア本国にある本社のドックに進路を取り移動を始めた。

（ルルーシユに転生したときは、どうしたものかと悩んだが、何とかここまで問題なく過ごせたな。シャルルにはすでにスパイを張り付けてあるからラグナレク接続に関しては当分問題ない。一年後にはソレスタルビーイングとコロニーのガンダムが活動を開始する……さて、どう動くべきか……）

ルルーシユは戦艦の自室でチェスをしながら、これから起こる混沌の世でどう動くべきか考えていた。

## 番外編

俺がルルーシュに転生したことで目標にしたのは生き残ることと、可能ならブリタニアに戻り、腐っている貴族達を一掃して皇族として生きることだった。例えば、原作通りに隠れて暮らしていても、母が平民の出というだけで、嘲られる状況は危険すぎるし、人質に出される可能性は0ではない。幼い身でもその危険性を肌で感じ取れた。他の皇族や貴族連中を何とかしない限り、安心できない。政争は完全に相手を潰すまでは安心できないのだと。

史実通りにマリアンヌが暗殺されたとき、行ったことは皇族として戻ってくる準備だった。つまり、V、Vの始末と味方を作る準備だ。オリジン・ローの本質の力を引き出せなくても、今扱えるレベルでもV、Vぐらいは消せる力があることを知った。それでコード所持者をコードごと消すことができると教えてくれたオリジン・ロー様様だな。だから、自分が人質として出されて起こる、極東事変を利用するつもりでいた。

南東の日本に送られる前に、内部の味方作りをしておくため、原作でも忠義の塊のジュレミアに部下になることを命じた。下した命令は情報収集と、貴族達とのパイプ作り、それをするためのブリタニア・ユニオンで出世しておくことだ。その命令を受けたとき、ジュレミアは感激のあまり号泣していて、少し不安になったが、能力的には問題ないので任せることにした。

予定通り、日本に送られたが人質生活は最悪と言ってよかった。常に見下され、憐みの視線に晒される。しかし、これぐらいでめげるわけにはいかなかった。二度目の人生を安全に楽しむためにも備えなければいけない。密かに能力を使い金を溜め始め、将来に備える準備期間としては充分だったので貯金の額は順調に増えていき、開戦前に外国の銀行に口座を移しておいたが、子供でこれに耐えるのはかなり辛かった。

だが、そんな辛く苦しい生活の中でも、親切にしてくれる人もいた。ルルーシュが持つ本来の甘さのせいなのか、或いは自分の甘さなのか



わからなかったが、気が付けばその人に懐いていた。優しく暖かい世界にすっかり浸り、皇族に戻らなくてもいいかなと思いはじめていた。しかし、その人も極東事変で亡くなった。

予め用意していた安全な場所に避難しようと思った矢先、ブリタニアが攻めてきた恨みからか、数人の日本人が自分を殺そうとしてきたのだ。その時に自分を庇い、瀕死の重傷を負い、自分に強く生きるように言い事切れた。

その後の事はよく覚えていない。そして、気が付いたらそいつらを血の海に沈め、その場に立っていた。

「そうか……。俺は地獄にいるんだな……」

自分の状況分析がどれだけ適当で楽観的であったかを理解した。そして、世界は残酷であるということも。

しばらく、気持ちの整理がつくまで避難場所で休み、次元力を制御する為に訓練をした。

そして、気持ちも落ち着き、今からすることに必要な力を制限できるようになった頃、戦争が終了した。

瓦礫の街を歩き、人が周囲にいないことを確認した後、目的を達成するには避けて通れないV，Vを抹殺することにした。奴をこちらに次元力で転移させた。急に俺の目の前に来たことに驚いていたが、境界を作って逃走できなくなった。そして、銃を向けたが奴はコードで死ななくて余裕ぶってたが、淡々と作業を行うようにコードを奪ったあと、V，Vの頭に鉛玉を打ち込んで始末した。こうしてV，Vは信じられないという表情しながら昇天した。

最大の死亡フラグを消し去ることができたので、心の中で思わずガッツポーズをしてしまったが、敗残兵等に死体が見つかるといけないので、念の為にV，Vの死体は油をかけたあと、火をかけて証拠隠滅を行い、その場を後にした。

その後、情勢が安定したのを見計らってブリタニア・ユニオン軍が駐屯している場所に赴き、素性を明かして保護してもらった。

「久しいな。我が息子ルルーシュよ」

「お久しぶりです皇帝陛下」

そして、しばらくして再びインパクト拔群の父親と対面した。何やら機嫌がよくないのは雰囲気を感じ取れた。

まあ、仕方がないか。兄とまったく連絡が取れなくなっただけではなく、計画に必要なコードが行方不明になったのだからな。俺に深く構っている時間はないのだろう。

「ルルーシュよ。特別に皇族への復帰を許可する。幸い、そなたが見つかったという報告を聞いて、ビスマルクがそなたの教育係を申し出てきた。ビスマルクの元で励むがよい」

「わかりました。命令を謹んでお受けいたします」

いきなり、理由もなしに復帰させてくれたことに驚いたが、V、Vの所在が不明の内に手を打っておくことにしたのでだろうと結論した。皇族への復帰が決まり、修行と這い上がるための奮闘がはじまった。

ちなみにコードは切り札として隠してある。いざというときの交渉材料だから、ばれない様に大切に保管してある。

当面の目標は安定した地位を築き、他の皇族、貴族共が自分に手出しができないようにすることだ。だから、今は耐えるのみ。いずれ、異世界にでも行って自分の思い通りになる国を作り、頂点に立って楽に暮らすのも悪くない。その為にもまずはブリタニア・ユニオンでの立身出世を目指す。邪魔者は誰であろうと消し去っていくまでだ。最も当分は訓練で地獄を見るだろうし、それを終えてからだろうが。

こうして、俺はルルーシュとしての人生が改めて始まったことを実感したのであった

## 第一話 特派

「泣かないでください、ルルーシュ殿下。私があなたの騎士になってあげます！ だから、世の中に絶望しないでください」

モニカ・クルシエフスキーと知り合ったのは偶然だった。ビスマルクに扱かれてたあと、己の不運を呪う日々。オリジン・ローの力もV、Vを葬るために使ったとき以外はうまくコントロールできずにいたので、迂闊に使うわけにはいかず、おまけに前世とは違い両親が助けてくれることも、優しく励ましてくれることもないので、世の中に対して恨みと悔しさだけが募っていた時期でもあった。皇族に復帰したとき甘さを捨てたつもりだったが、やはり、そう簡単にはいかなかった。

妹のナナリーとも生き別れてしまい、内心かなりさびしかったことも重なってか、力があっても世の中がそう簡単に変わるわけがないと思いつらされ、世界をめちやくちやにしてやろうかと、どす黒い感情も吹き出し掛けていた。そして、世の中を変えるには力が必要だが個人の武では限界があるのだということを、同時に悟ったときでもあった。

ネガティブな考えをしていたせいか顔を伏せて涙を流してしまっただ。それを偶然モニカに見られてしまい、優しく励ましてくれたのだ。しかし、自分は後ろ盾のない弱い皇子。騎士になってもいい思いはできないよと答えたら、それでもなりませんと笑顔で言ってくれたことはとても心に響いた。

そして、自分が皇族としての力がある程度取り戻したとき、約束通りに騎士になってくれたことは信頼できる人間も世の中にいるのだと思えた瞬間だった。

この後、ルルーシュはビスマルクの地獄の教育という名の折檻を耐え抜き、ブリタニア・ユニオンの中で立場を確立していった。

A E U アフリカ軌道エレベーター。

そこでは人革連の記念式典に合わせて、新型MSイナクトのお披露目が行われていた。

しかし、それはソレスタルビーイングのガンダムとコロニーのガンダムというイレギュラーの乱入で混乱し、AEUは軌道エレベーターに条約以上の戦力を張り付かせていたことを、白日の下に晒してしまっただけだった。

この後、ソレスタルビーイングの声明が発表されて彼らの目的が明かされたのだが、世界の反応は鈍かった。

「思ったより反応が鈍いですね」

「当然だ。ガンダムはすでに私が発表している上に、コロニーもガンダムを用意して地球に投入してきた。だから、最初のインパクトが思いのほかなかったせいだろう。それに戦争根絶なんてできるわけがないと思っている者もいるし、一部の人間には関わりがないしな」  
ルルーシュはモニカの質問に答えながらソレスタルビーイングの声明を録画した映像を、エリアーの東京租界に待機させている、万能戦艦リンドヴルムの司令室で呆れながら聞いていた。知識や記憶ではわかっていたが、いざ聞いてみると荒唐無稽すぎて、実感がわかないのが正直な感想だった。

「じゃあ、ルルーシュ様は本気で戦争をなくすことができると思う？」

ステラはかわいく首を傾げて、戦争根絶は可能なのかとルルーシュに尋ねた。

戦争はなくすとは国を変えることよりも難しい。末期状態のブリタニアの腐った状態に変化を革新の難しさをよく知っている。

「……ほぼ不可能だろうな」

「ほぼ？」

「ああ。この世に絶対なんてないから……母が殺されたようにな……」

ルルーシュは少し、考えるそぶりを見せた後、ステラに向かって言葉を紡いだ。

自分がルルーシュに憑依・転生したことから、ありえないことはあ

りえないと考える思考が生まれていたのでそのような結論に至った。それに幸せな生活が続くと思っていた子供時代に、母が薨去し、人質として送られる等当時は思ってもいなかったのだから尚更だった。

最もその時にオリジン・ローの力で転生・憑依したことを悟り、人にはない能力を身に着けた。そして、それを利用し、イレギュラー対処も少しはまともになった結果、多くの戦功を上げてこの年で大出世して今があるのだ。

「……ルルーシユ様、突然話題を変えますが、このエリアで行方不明になったナナリー様は御心配ではないのですか？」

「……」

ルルーシユは申し訳なさそうにモニカが妹のことを尋ねたので、表情を暗くした。

原作とは違い、中身が俺なのでシスコン度は高くないが、やはり血の繋がった妹は心配だった。別れたときはスザクが一緒だったはずだから大丈夫だと思うが、すでにコードギアスの原作の流れから逸脱しているせいか、アツシユフオード学園にいるかわからないし、探りを入れたが確認できなかったのだ。

ナナリーのことを心配していると急に艦内オペレーター、黒髪の少女エリス・クリシエシスカヤから連絡が入った。

「何かあったか？」

『特派のロイド伯爵がルルーシユ様に会いたいと言って尋ねてきました。今はMSが置いてある格納庫におられますがいかがなさいますか？』

ルルーシユは特派が会いに来たことに疑問を感じたが、断る理由もないので会うことにした。

「わかった。私がそっちに行く」

『え?! お呼びすべきでは?』

エリスは皇族が自ら会いに行くのに驚いた。いくら、特派がシユナイゼル直属でも、身分も地位もルルーシユの方が高いから普通は呼び出す方だ。

「どうせ、格納庫でMSやKMFを見ているだろう? 俺が会いに

行った方が時間に無駄がない」

『イエス・ユア・ハインス』

ルルーシユはエリスの通信が切れたあと、司令室から出て格納庫に向かった。

「これが殿下が開発したという最新型MSですか……」

「はい。二年前に発表した試作型のデータをもとに新たに製造された最新機です。こちらがルルーシユ殿下専用機の可変MSアヴェインイージスです。こちらが専任騎士のクルシエフスキー卿の専用機シヤナストライクです」

「なるほど。それで最近噂のソレスタルビーイングのガンダムやコロニーのガンダムとどちらが性能が上なのかな？」

シユナイゼル特派の研究者、ロイド・アスプルンド伯爵とセシル・クルーミーが格納庫で、技術顧問と整備士長から説明を受けていた。

「それは実際やってみないと何とも言えません。別系統の技術が使われているようなので……」

「ふむふむ、なるほどね。それにしてもKMFも搭載と整備も可能とはすごいね」

「本当ですね。それに武装といい、居住性、艦速、整備性といいブリタニア・ユニオン軍でもこれほど高性能の艦はそうそうありませんよ」

技術顧問と整備士長は無難な回答をして、質問を躲し、次に公表可能な情報を。

ロイドとセシルは旗艦であるリンドブルムの性能を素直に感心していた。設計案で見たことあるアヴァロンは愚か、三大陣営のどの艦よりも性能は遥かに上である。

「ルルーシユ殿下は資金が豊富ですから、大抵の科学者や研究者は傘下にいますからね。そして、実績と有用さえ認められれば実験段階の技術でも研究費を上乗せさせてくれますしね」

ルルーシユは最新技術開発に多額の予算を注ぎ込んでいるので、科学者や学者、技術者からはかなり崇拜されていた。こういう者達は自

分達の研究費を多く出してくれる上司が全てなのだ。その為に皇族中で最も資金力を持つといわれるルルーシユは上司として仰ぎたいトップ5に入る。

「うらやましいね。その予算こっちに分けてくれないかな？　ランスロットをもっといい機体に仕上げたいんだよね〜」

「それなら機体共々俺の元に来い。無論許可を貰ってだがな」  
涼しげな声が聞こえた方に全員が振り向くとルルーシユがいたので、技術顧問は敬礼した。

ロイド達特派の人間は正直ほしい。ランスロットは第七世代KMFだし、その技術を接収してKMF開発部門の技術強化ができるだろう。

何より、スザクフラグを叩き折るいい機会だったので、ルルーシユは自分が生きる確率を上げるためにロイドを誘った。どうせ、自分はゼロにならないから出世の機会はないだろうし。

「さらにユーロ・ブリタニアの監視目的に戦線へ赴く機会もあるかもしれない。データを取るのにも困らないぞ？」

「本当ですか!?!　行きたいで「だめですよ！　ロイドさん!」……は〜い」

ルルーシユは悩んでいるロイドにこちらの旨みをチラつかせてみた。

案の定、ロイドはランスロットの研究さえできればいいのか領きかけたが、セシルが声を荒げて止めた。案の定セシルには逆らえないらしい。

「ロイドさん。ルルーシユ殿下も仰った通り、私達はシユナイゼル殿下の部下なんですよー!」

「でも、許可さえもらえばいいんじゃない？」

「ロイドさん……シユナイゼル殿下がそう簡単に許可を出すと思いますか？」

セシルは駄々をこねるロイドに、手を額に当てて呆れながら突っ込みを入れた。

「こちらは別に無理に誘っているわけではない。下手に引き抜くわ

けにはいかないから、あくまで自主的に来てくれよ。貸しは作りたくないからな」

ルルーシユは念の為に予防線を張っておくことにした。シュナイゼルに貸しを作ると確なことにならないのは目に見えているからだ。ランスロットはほしいが、シュナイゼルに貸しを作る方がリスクが高い。

「わかりました……。さっそく、その方向で相談してみようかな」

「ロイドさん！ 申し訳ありません、ルルーシユ殿下。そんなにお気になるのならランスロットを見てみませんか？ よければ案内しますか？」

「頼む」

「わかりました。こちらです」

ルルーシユはランスロットを見るべくセシルの案内で特派のトレーラーに向かった。



## 第二話 待機命令

ランスロットを見た後、乗ってみて性能は素晴らしいKMFだった。しかし、こんなピーキーな機体乗りこなせるのはラウンズクラスだけだろうというのが正直に思った。

ロイドは自分がランスロットを乗りこなしたのを見て、「デヴァイサーになってくれない！」と笑顔で迫られたときは少し引いてしまった。こんな上司で苦勞しているセシルの苦勞がわかった気がした。

数日後シュナイゼルは特派を許可を出さないだろうと思い、半分は冗談で言ったことがあっさり受理されたことに、驚いたルルーシュはシュナイゼルからその連絡が来たときに理由を聞いてみた。

「前にEU戦線に行ってもらったお礼だ。陛下ではなく、私の頼みだったから、私からその時の礼を出すのが礼儀だろうと思ったからね」

前回のEU戦線の報酬に特派をくれたというのが答えだった。念の為に書類等や本国への確認も行つて事実だと確認したので了承した。もちろんスパイがないか確認してから受け入れたが。

この世界のスパロボはOOをAEUと、コードギアスのEU（ユーロピア共和国連合。位置は北アメリカ大陸とヨーロッパの間に位置していて大西洋も原作よりも広がった）が存在している世界だったので、その事実を知った時は随分驚いた。

ちなみに、この戦線には命令で3回程赴いて、3回目ですタンブル周辺を完全制圧したのは記憶に新しい。

ちなみにEUがAEUに助けを求めている。拝金主義者が自分の利権を取られるのを恐れているという、何とも保守的な理由だと知った。

そして、現在ユーロピア共和国連合は、ブリタニア・ユニオンに押されまくっており、陥落も時間の問題になっている。一時期AEUはOZのトップ、トレーズ・クリシュナーダに相談して、援軍を寄こそうかと言ったそうだがユーロピアは黙殺したらしい。恐らく、トレー

ズのカリスマと、背後の力に自分達の權益を奪われることを嫌った連中が、圧力をかけたのだらうとルルーシユは推測していた。

「まあ、許可が出た以上歓迎するぞ。これから私の力になってくれ」

「イエス・ユア・ハイネス」

ランスロットのデータ収集に夢中なロイドの代わりにセシルが返事をした。

こうして、特派がルルーシユに加わり、KMF部門で技術が大いに強化されることになった。

「軍本部から通達です。しばらくは待機とのことです。コロニーのガンダムがこのエリアに潜入したらしいので万が一見つけたらできるだけ排除するようにとのことです」

「自分達の統治の失敗のツケをルルーシユ様に払わせるなんて……本当に今の貴族は末期状態になっていきますね」

「ルルーシユ様が仰っていた通りですね……」

オペレーターから軍本部の要請を聞いたあと、休憩室で談笑していたモニカは内心憤慨し、マユは軍本部の命令に呆れていた。

ルルーシユはコロニー問題について以前、コロニーに出資した資産家や貴族に意見を求められたことがあった。その時、懐柔策を提示したが却下されたのだ。皇族に意見を求めておきながらそれを深く考えもせずに無下にされたのだ。その多くはルルーシユが平民の血を引き、一度は皇籍を剥奪され人質として送られたことを内心バカにする者達だった。

「ルルーシユ様もばやいていたよね。エリア統治に関することは自分には関係ないって。自分にその権限が与えられていないから」

「おまけにその理由が他の皇族がエリア総督に就かせたくないというくだらない理由なんですけどね」

ルルーシユが独自裁量権をある程度持つ総督に就任できないは、他の皇族が止めているからだ。

聡明な上に豊富な資金を持つことが、よりいつそう拍車を掛けていることを理解していた。

「オペレーション・メテオ……。何とか叩き潰せないかなモニカさん？」

「ルルーシュ様もコロニー整備の為に資金を出しましたからね……。今回の被った被害を考えると、戦場で出会ったら容赦なく撃墜してもバチは当たらないでしょう」

コロニー側の行為は地球にある政府への宣戦布告。その為コロニーにある資産は実質接收、凍結されてしまった。幸いルルーシュがその動きを事前に察知していたので怪しまれない程度に地球の方に移っていたので被害は少なかったが、主君に害を及ぼしたには変わりないので、モニカは腸が煮えくり返っていた。

『モニカ、マユは念の為機体で待機しろ』

「ルルーシュ様!?!」

「待機ではなかったのですか？」

主君が急に連絡を入れたきたことにマユは驚き、モニカは本国から命令があるまで動くなと理由を尋ねた。

『問題が発生した。兄上からもしかしたら救援要請をされるかもしれない』

「問題？」

『詳しいことは教えてもらえなかったが、極秘裏に研究していた兵器をテロリストに強奪されたらしい』

ルルーシュはクロヴィスに軍を動かした理由を尋ねたら、そのように返されたので、万が一何かあるかもしれないから備えて置けと二人に言った。

『両名は機体で待機せよ。何かあれば出撃してもらおう。ステラはすでに自機で待機している』

「イエス・ユア・ハイネス」

命令を受けた二人は休憩室を後にした。

「エリス、状況はどうなっている？」

「クロヴィス殿下は本格的に軍を展開し始めました。KMFも出撃させるようです」

「何か動きがあったら随時報告しろ。私は動きがあるまで自室にいる」

そう言ってメインブリッジを後にした。

勿論、俺は奪われた物が何なのかわかってる。

前もってジエレミアに、どさくさに紛れてカプセルを開くように命じてあるので、C、Cを解放させる準備はできている。

俺がいないから、扇グループは壊滅してしまうけど仕方がない。正直あいつ等いらぬし。それにコードギアスならともかく、スパロボだから大した影響はないだろう。

カレンはどうするべきか迷っている。当初は見捨てる予定だったが、シユタツトヘルト家を取り込むのに使えるかもしれない。

「問題はどうか説き伏せるのだが、その前に兄上から救援要請が出ないかどうかにもならないな」

そもそも、自分（ルルーシュ）がいないから苦戦しない可能性が高い。

結局、カレンに関しては状況次第で助けるかどうか判断することにした。

「整備長。私の機体を出撃できるようにしておいてくれ」

『殿下自ら出撃されるのですか？』

「兄上から要請が出たらな。久々に暴れるのも悪くない」

『イエス・ユア・ハインズ』

ルルーシュは整備長に機体の準備をするように命じ、水を一杯飲んだ。

### 第三話 出撃と交渉

G-1ベースでクロヴィスは焦っていた。

不老不死の少女を捕まえて、毒ガス兵器と偽り研究していたが、それをテロリストに奪われてしまい、治安警察程度では無理と判断し、奪還すべくKMFまで出撃を命じたまではよかったのだが、回収は未だになっていない。

その為、ゲツトーごと殲滅すべく全戦力を投入を決断し、MSユニオンフラッグ三機を出撃させた。操縦者は虐殺に抵抗を覚えたが、命令なので出撃していった。これにより抵抗も小さくなっていったが、このエリアに潜伏しているコロニーのガンダムまで現れて新宿ゲツトーは戦場になってしまった。

コロニーのガンダムとATによって次々と機体が破壊されていき、ロストの文字が画面に浮かび上がっていった。

別の租界に援軍を要請してあるので、時間が経てば物量で押し切れるだろうが、被害が大きくなれば自分の能力を疑われてしまい、下手したら没落することになる。

散々悩んだ末、ルルーシュに救援要請をすることにした。責任は取ってくださいと言われるだろうが、このままでは、被害が大きくなりすぎる。

「ルルーシュに繋いでくれ」

「援軍を要請されるのですか!?!」

部下の貴族は驚いた。ここで知患者と名高いルルーシュに借りを作っては、それを理由に何を要求させるかわからない。

それに手柄がルルーシュの物になってしまうことに欲深い貴族が抵抗覚えてしまい、素直に領けない。

「そうだ!、これは命令だ!」

「イエス・ユア・ハインス」

だが、皇族であるクロヴィスの命令には逆らえないので領き、通信士に通信を入れるように命じた。

通信士がリンドブルムに通信を送り、画面にルルーシュが映る。

『何かご用でしょうか？ 総督閣下？』

「やあ、ルルーシュ。最初に断ってしまったけど、援軍を要請したいんだ。いいかい？」

『……わかりました。ただし、私の部隊はあなたの指揮系統に組み込まれていません。独自に動きませんがよろしいでしょうか？ それと少しKMF部隊を貸して頂きたいのですが？』

クロヴィスの命令を受けるのは御免なので、独自に動く許可を要請した。そうしなければ、己の目的の為に行動できないからだ。

「わかったよ。本来君の部隊の指揮権は私にはないし、部隊を貸すのも許可する」

『わかりました。では、出撃します』

言質を得たことを確認したあと、ルルーシュが映像から消えた。

「これで奴らも終わりだな」

「ええ、数ではこちらが勝っていますし、時間が経てば援軍も来ます」

クロヴィスはグラスに入っているワインを飲み、一息ついて安堵したのであった。

一方、救援要請を受け取ったルルーシュはMS部隊に発進命令を下し、自らも愛機に搭乗していた。

「モニカとマユはフラッグ部隊と連携してコロニーのガンダムを押しさえろ。私はテロリストを捕える」

「御一人ですか!? 私はルルーシュ様の騎士ですよ！ お供します！」

ルルーシュが下した命令にモニカは反論した。ルルーシュの腕前はモニカがよく知っているし、相手は横流しであまり整備されていないグラスゴー。そんな貧弱な武装では機体に傷一つつけられないはわかっているが、自分はルルーシュ様の専任騎士。守るべき主君の側を離れるわけにはいかない。万が一のことがあってはいけないのだ。

「艦を空にするわけにはいかないからな。人手が足りないから仕方ないだろう。それにそう思うのなら、さっさと奴らを排除してこちら

に來い」

「……わかりました。奴らをとつと排除してそつちにいきますからね！ 無茶はしないでくださいよ！」

「じゃあ先に行くね。マユ・アスカ、インパルスノワール出ますー」  
ルルーシユがモニカから注意を受けている間に発進準備が完了したのか、マユのインパルスノワールが出撃して飛んでいった。

『シャナストライク、アヴェインイージス発進準備完了です』

「モニカ・クルシエフスキー、シャナストライク出撃します」

MS件KMFオペレーターに任命されたセシルが発進準備完了を伝え、続いてカタパルト移動し終えた、モニカのシャナストライクが出撃し、飛んで行った。

「さて……、運命はどちらに味方するのやら……。ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア、アヴェインイージス出るぞ！」

ルルーシユも艦から発進し、空中でアヴェインイージスを高速巡航形態に変形させ、赤いグラスゴーを見つめるべく飛翔した。

今回のテロを起こした扇グループの探索を始めたが、しばらくして、カレンが乗るグラスゴーと扇グループを発見した。

そして、クロヴィスが寄こした援軍に通信を入れて、もし、テロリストがいたら、可能な限り殺さずに捕まえるように命じて、赤いグラスゴーに突撃し、蹴りをお見舞いした。

「初めましてかな。グラスゴーのパイロット君」

「MS!?! ぐっ！」

カレンはバランスを大きく崩した、グラスゴーを立て直すのが、容赦なく追撃してきた黒と金色カラーリングが施されたガンダムタイプのMSが繰り出した、斬撃によってグラスゴーの両腕を切り裂かれた。

ルルーシユは一旦空中に離れたが、グラスゴーが反撃としてスラッシュハーケンを飛ばしてきたが、冷静にそれを弾き、スラッシュハーケンのワイヤーを切断した。

「武装がー！」

「チェックメイトだ。機体から下りて武装解除しろ」

「くっ!? ブリタニアめ!」

MSから降伏しろという声が発せられたが、カレンは逃走すべくKFを動かそうとしたが、その前にルルーシュが脚をビームライフルで射抜き破壊した。

「手間を取らせるな。機体からさっさと出ろ。」

「っ!? 捕虜にして辱めるつもりか!」

「そんなわけないだろ。素直に言うことを聞けば巻き込まれた被害者として家に帰してやる」

カレンは相手を見逃してやると言ったことに耳を疑った。テロリストである自分にブリタニア・ユニオンが情けを懸けるわけがないのだ。

「信用できるわけないだろう!」

「御最もな意見だ。カレン・シユタツトフェルト。いや、紅月カレン」

「なっ!」

カレンは自分の素性がばれていることに焦った。

別に両親がどうなろうと知ったことではないのだが、名前を知っているとすることは顔もばれている可能性が高い。これでは例え、逃走に成功してもこれからのレジスタンス活動に支障がでてしまう。

「君が考えて要る通り、私は君の素性をほぼ把握している。その考えもな」

「だから、何だつてのさ!! 脅すつもりなら無駄だよ!」

「私と君の会話は他の者には聞こえていない。だから、話し合いをしよう。君にとっても不利益ではあるまい」

「話し合い? ……何だい?」

ルルーシュは荒ぶるカレンを宥めつつ、交渉に入った。

カレンは話し合いをしようと言う、相手を警戒したが、自分は動けない上に相手の技量は凄まじい。自爆を試みてもうまくいかない可能性が高いので取り敢えず、聞いてみることにした。

「先程言った通り、私は君のことを目的を含めてほぼ把握している。だから、いきなり本題に入らせてもらう。私の部下となれ」



「なっ!? ふざけないで! 誰がブリタニアの言いなりになるもんですか!!」

ルルーシュが言ったことにカレンは激怒した。

ブリタニアの犬になって働く等、自分の母と同じ境遇に甘んじるということだ。日本人としての誇りがある、カレンには到底受け入れられないことだった。

「話は最後まで聞け。お前は日本を独立国に戻したいのだろうか?」

「そうだ! この国をお前達から取り戻す為に戦っているんだ!」

「なればこそだ。お前は自分の立場と才能を有効に使うべきだ。いくら小さいレジスタンスグループで頑張っても目的を達成できんぞ」激昂するカレンにルルーシュは今の活動では到底無理と否定した。だから、その能力を有効に活用して現実的に主権を取り戻す方法を説くことでカレンを説得しようと考えたのだ。

「残念ながら、レジスタンスが束になってもブリタニア・ユニオンに勝てない。軍事力に差がありすぎるからな。主権回復させたいなら、多少の我慢してでも可能性が高い方に賭けるべきだ」

「信用できるか! どうせ使い捨てにするつもりだろう!」

カレンは名誉ブリタニア人やナンバーズが使い捨ての駒にされていることを思い出して拒否した。基本ブリタニア・ユニオン（主に転移してきたブリタニアの人間）の人間はエリア住民を人扱いしないから当然だが。

「……自己紹介をしてなかったな。見ず知らずの人間に部下になれと言われてたら信用できないのも当然だったな。私はブリタニア・ユニオン第十七皇位継承者、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ」

「皇族!?!」

「そうだ。もし、私が皇帝になったらこっちの日本を独立させてあげよう……つと云つても信用してもらえないが、ここで死ぬのは君も本意ではあるまい。……どうやら、私の部下が君たちが奪った物を回収したから時間もないから詳しい話は後でしょう」

ルルーシュはそう云ってカレンを宥めた。

カレンは無論信用していなかったが、作戦が失敗した以上、自分が

生き残る方法は目の前の皇子に下るしかない。

それに相手の言葉に抗いがたい魅力が無意識に感じてしまい、何となくだが話だけでも聞いてみようと思った。

「……わかったわ」

「君の英断に感謝する。少なくともテロリストとは関係ないことはするつもりだ」

ルルーシユはカレンが承知したことに頷き、内心安堵した。

もし、自爆したら貴重なラウンズクラスのパイロットを失うことになる。それに犯人を追いつめて置いて自爆されたら、今回出撃した意味がなくなるので目的を達成できたことにほっとしたのだ。

カレンがグラスゴーから下りて、退避したことを確認したルルーシユは、証拠隠滅の為に全火力を持ってグラスゴーを破壊した。

その後、カレンを手の平に乗せてリンドブルムに帰還し、説得に当たった。

結果、カレンはルルーシユの現実的な案に頷き、部下になることを了承したのであった。これにより、ルルーシユはKMFパイロットの確保に成功したのであった。

ちなみに綺麗で若い女子高生だったので、勘違いしたモニカが彼女を鋭い目つきで彼女を見て、カレンが寒気を感じたことはルルーシユは知る由もなかった。

## 第四話

先の騒動でカレンを加えてルルーシユは今回の事後処理を終わらせた後、シユタツトフェルト伯爵家に連絡を取って、彼女を直属のKMFパイロットにすることを伝えた。

そのことに伯爵は驚き、詳しい話をするために密かに訪れたルルーシユに訳を聞いた。様々な話し合いを行い、時にはカレンのしたこと脅し、時には自分についていけば利益になる理由を話して、飴と鞭をチラつかせながら交渉は進んだ。

最終的に皇族直々の要請を断ることもできず、弱みと利益を天秤に賭けた結果、すぐく疲れた顔でカレンを軍に入れることを認め、後ろ盾の件も了承してくれた。ちなみに、交渉が終わり帰ろうとしたら、部屋で準備をしていたカレンが下りてきたが、父親に見つかり大叱責を受けた。

だが、カレンは顔を合わせようとしなかった上、そのまま玄関から出て行った。

そのほかの根回しを全て完了したルルーシユはカレンを格納庫に連れて行き、彼女が操るKMFを説明した。

「これが当分君の機体になる、ランスロットだ。詳しい説明はロイド伯爵とセシル・クルーミーに聞いてくれ」

「ねえ……この機体ってひよっとして最新型ですか？」

「そうだ。世界唯一存在する第七世代KMF。試作機だが、凄まじい性能だ。君なら乗りこなせるだろう。シユミレーターの結果は92%だったのだろうか？」

ランスロットを乗れるデヴァイサーを連れてきたから試してくれとロイドに言っ、シユミレータをやってみたら適合率が凄まじく、ロイドが大はしゃぎしていたのを思い出して、ルルーシユは苦笑した。

結果、データを取りたがっていたロイドの意見を聞き入れて、カレンを即座にこの機体に乗せることを決定した。

ロイドが稼動データを集めることができると格納庫で変な動きを

して大喜びしていた。最も格納庫にいた整備士が若干引いていたが彼は気にしていなかった。

「ロイド、セシル。ランスロットの件はお前達に任せろ。私は少し休憩する」

「了解です〜♪ 彼女の出撃機会くださいね〜」

「ロイドさん！ ごめんなさい、さっそく説明を始めるわねカレンさん」

「は、はい。お願いします」

カレンはロイドの変な動きに引きつつも、セシルの説明を聞き始めった。

ルルーシユは自室の戻り、一息ついていた。

カレンを説得するのかなり手間取ってしまったからだ。慎重に言葉を選びつつ、利点と方法を説明しながらの交渉であった。

最初は頑なにブリタニアの為に戦うことを拒否していたが、カレンの流されやすい性格を思い出して、言葉遊びでその気にさせて、ここぞばかりに皇帝になったら独立させてやると説得した結果、首を縦に振らせることに成功した。ちなみに扇グループは全員無事だったらしいが、所持していたKMFを失った為に組織としてはほぼ無力になった。

そこで扇グループは放置することにした。幸い、逃げ足だけは早かったらしく、見つかる前に逃げしてくれたから、映像にも残っていないので好都合だったが、口の軽い玉城にカレンのことを言いふらされ、噂になることは避けたい。最もカレンは自分の所で働くことを知らせていない。

身内びいきで仲間思いの扇グループのメンバーにブリタニア・ユニオン軍で働くことを知られたら、裏切り者扱いされることを恐れているらしく、こちらに頼みに来た程だ。

「これでカレンの問題はクリアーだな。IFX-V301ガウエインは今すぐこちらに搬入されるから、その準備もしておかなければいけない。複座式を単座式にして、武装の改造が終わりしだい輸送

すると言っていたから整備マニュアルを今のうちに整備士に渡しておくように命じておくか」

IFX―V301ガウエインは未完成だった物を譲ってもらい、わが社で改造を施している。

あの機体はドルイドシステムがあるから扱える人間に限られてくるからな。

「次はラクシャータを取り込まなければいけないな。奴の技術もほしいからな……」

予算を餌として何とか水面下交渉を行っているが、未だに返事が無い。やはり、ロイドがいるのが原因なのだろうか？

この世界のKMF開発や製造はほぼ自分の会社にある。MSが存在するこの世界ではKMFはあまり重要視されない傾向にあり、生産数も多くないのだ。それに加えてKMFは貴族階級の者しか乗れないので数を揃えることが難しく、軍事作戦にあまり貢献しないのが現実だった。

「そんな意味ない思考するよりも今は技術者と研究者の確保だ。やはり紅蓮を鹵獲して、それを餌として利用するか……。それは追々考えることにして、問題はいつまでここに滞在できるかだが」

色んなプランが頭に思いついたが、決めてに欠けていた。カレンには紅蓮のパイロットをしてもらうので、それが手に入るまではランスロットのデータ集めをしてもらうつもりだ。本人も紅蓮の存在を教えたとき、それを乗ることを希望していたので、要望は叶えてやるつもりだ。

懸念事項があるとすればエルガンによるZIXSIE結成が起これば、自分達はソレスタルビーイングのガンダムを鹵獲するための作戦に駆り出される可能性が高い。そして、なるべくなら、ガンダムを鹵獲してしまいたい。そうすれば大つぴらにGNドライブが製造ができる。最も今作ろうと思えば作ることが可能だが、奴らの仲間と怪しまれる恐れがあるから、提供されるか鹵獲するまでは製造する気はない。

「前途多難だ。次の命令次第では紅蓮鹵獲は諦めざるを得ない。だ

から、交渉を急がせて、早めに決断したかったのだが仕方がないか。次は各地に放つてあるスパイからの報告を受けなければいけない」

紅蓮関連の問題は交渉しだいなので、後回しにすることにした。世界中に放つてあるスパイの報告書類を読みながら、秘密回線を開いた。

「……コロニー04のガンダムは行方がわからなくなったけど？」

中東諸国に探りを入れる。恐らくどこかの国に匿われているはずだ。……コロニー05のガンダムの追跡は順調だな。そのまま追跡を続行しろ」

コロニーのガンダム全機に一応スパイを張り付かせているので、定時報告は常に入ってくる。オペレーションメテオに参加したガンダムパイロットはまともがない。今なら各個撃破できるが、現存するMSでは歯が立たないから、実行に移すことはできないでいるのが現状だ。

「やはり、新たな新型が必要だな。ゲステイニーインパルスEは機体の6割は完成しているが、疑似太陽炉を搭載する予定だから完成に至っていない。俺の新型はほぼ完成しているが最終調整が終わっていない上、今は使うことはできない」

無論、新型は一年後に備えて開発している物で、今使っているMSで充分なのだが、敵の能力も高いから確実に仕留めるための戦力がほしいのが現状だ。それにベテランパイロットはそう簡単に補充できないので性能に優れているMSを作ることは悪いことではない。

「そうか。エルガンが動き出したか。それに呼応してアレハンドロトリボンズが動き出したようだな。今の所順調というわけか」

カワグチ湖でのサクラダイト供給会議前にZEEXISは結成され、それを解決する為に派遣させるはずだ。

この事件を利用して黒の騎士団は世界に注目されるようにしたが、この世界では勿論ないので人質をどうするか思案したが、結局、暁の牙と日本解放戦線がそれをやる余裕がない程、敵を弱体化させるしかないと結論したのだ。

「姉上なら簡単に許可がもらえるのだが……。幸い、今回の件を

貸しにできたからそこらへんで許可をもらおうとするか。それと根回しをしておかないとな」

ルルーシユは解放戦線をさつさと始末すべく行動を開始することにした。さつそく、兄である、クロヴィスに連絡を取り、許可を貰うべく交渉を始めたのであった。最も自分をかわいがっている姉コーネリアのご機嫌も取っているが、役に立つからそのように振舞っているにすぎないので、ルルーシユにとっては利用できれば姉だろうが、兄だろうがどっちでもいいのだ。

数日後、兄クロヴィスの許可が下り、本国の参謀本部の了承が下りた結果、ルルーシユはナリタ連山攻略をすることを決定した。

## 第五話 ナリタ戦

ナリタ連山。そこには最大級のレジスタンスグループの本拠地があり、ルルーシユは現在敵の射程距離から離れた場所に戦艦を着陸させて作戦を部下達に話していた。

「作戦内容は至ってシンプルだ。ステラとカレンは正面から突っ込んで派手に敵を引っ掻き回せ。だが、敵基地制圧が可能ならしてもかまわん。マユは別方向から兄上が派遣してきた部隊を率いて基地の入口を目指せ。モニカは私と共に遊撃だ。空中から敵の火砲を無力化しつつ、他の部隊の援護に当たる」

ルルーシユの作戦はとつてもシンプルだった。指揮系統、物量、部隊練度、装備において全て勝っており、特に小細工は必要ないと判断したからだ。

「問題はコロニーのガンダムだが、奴らが万が一出てきたらKMF部隊は下がらせる。無駄に消耗するだけだからな」

ガンダム相手に量産型のKMFでは叶わない。ゲームでは補正があるから互角に戦えているが、現実だとKMFはMSの火力には敵わないので一方的に撃墜される。ランスロット等のワンオフ機なら話は別だが超高性能のガンダムには遠く及ばない。おまけに破壊事変では空戦をできるKMFはほぼ皆無なので空から撃たれたら対処の仕様が無いのだ。しかし、コロニーのガンダムはウイングガンダム以外は飛べないから、その機体だけ警戒すればいいだけだ。

「ガンダムは私とモニカが相手をする。その間に基地を落とせ。奴らも基地が落ちたあとまで戦おうとは考えないだろう。それ以外には臨機応変に対応する。周辺の住民の避難は完了しているな？」

「はい。すでにあの周囲には無人な上、周辺の封鎖は完了しております」

「唯一の懸念は藤堂だが、こつちが先手を打った以上は奇策を弄する暇はないだろうが、油断はするな。私からは以上だ。何かわからないことがあったり、質問がある者は申し出る」

ルルーシユは周りを見渡すが誰も言わなかった。



「質問がないのならブリーフィングは以上だ。作戦開始は1時間後。準備に掛かれ」

「「イエス・ユア・ハynes」」

ルルーシユの指示に全員が頷いた。

「ルルーシユ殿下は気が利くよね♪ ランスロットをいきなり出撃させてくれるなんて〜」

「ロイドさん。これから戦場なんですから少しは緊張感を持ってください」

「ごめん、ごめん。でも、空中に浮ぶこの艦に攻撃をする余裕が敵にあるとは思えないけどな〜」

格納庫でロイドが緊張感のかけらもない呑気な声を発しながら、ランスロットの最終調整をしていた。セシルはロイドのあまりにも緊張感のなさを咎めた。

「それよりもカレンちゃん、何か元気ないね。まあ、あんなことがあったから仕方ないけどね」

「そうですね……」

1週間まえ、カレンの実母である小百合がリフレイン常習犯として捕まったのだ。そのとき何かあったのかカレンはショックを受けて、三日程休んでいたのだ。

「まあ、今は何か決意したみたいにする気出しているみたいだから、僕たちがとやかく言う必要はないよ」

「そうですね」

ロイド達は、カレンの心の問題だから作戦行動に支障がない限りは放っておくことにしたのだった。

ルルーシユはその頃、自室でスパイからのソレスタルビーイングと国連の動向と、シユナイゼルがトモロ機関で建設中のダモクレス要塞の詳細を報告書類でチェックしていた。さらに確証を得る為に、目にも留まらない早業でハッキングを行い、必要な情報を引き出していた。

「エルガンが動き出したか……。想定していたより動きが早いな。ゼロである俺がゼロになっていないことに焦ったようだな。ソレスタルビーイングは変化なしか。ヴェーダのイノベイト生産プログラムをようやく発見した。あとはその時を待つだけだな」

エルガンの仕事の日程等を調べ上げて、ZIXES結成が早まる可能性があると判断した。

恐らく、自分が知る未来と別の道を歩み始めたことに疑問を持ち始めて予定を早めたようだ。

「シユナイゼルにはやってもらいたいことがある以上、今は生かしておくが、いずれ処分してやる。私に資金提供を強張り、あのような要塞を作らせているのはその為だからな」

シユナイゼルにはペンドラゴンを吹き飛ばしてもらおう役目がある。他の皇族達や貴族が奴に反発するように仕向ける工作の準備をしているから、是が非でもやってもらおうつもりだ。

皇帝である父は兄のコードとC、Cのコードを手に入れる為に原作以上に政治に関心が向いていない。機情を動かして搜索ばかりに専念していた。

やはり、V、Vを始末したことはこちらの行動を制限する枷を減らしたようだ。そのおかげで色々と仕込みと準備に障害がない。あいつまじで意味不明な人物だからな。うそが嫌いなくせに弟のシャルルにすら平気でうそをついたのだから。思考がガキの頃から変わっていないのだろう。うそのない世界なんて作れるわけないしな。最もすでにその計画は、自分がコードを奪った時点で破綻しかけているが。

「最初は皇帝の地位が必要かと思っただが、ここまで準備ができているとなると寧ろ、足枷になる恐れがでてきたな」

社員や部下は全て自分の私兵とも言っている、拠点確保も順調だ。一から作り上げただけに、うまく機能している。だが、皇帝になれば少なくともブリタニア・ユニオンの政治までしなければいけない。面倒な宮廷の雀共や政治家達、役人等を相手にしなくてはいけないのだ。

「まあ、これは後で考えればいい。今はナリタの作戦に集中するか」  
ルルーシユは間もなく作戦開始時刻になること気づき、端末の画面を閉じて、格納庫へと向かった。

ナリタ連山で戦闘が開始された。

情報封鎖を徹底して奇襲をかけたので、敵は慌てて迎撃部隊を出してきたのか、かなり陣形が乱れていた。こちらの陽動作戦が功を制したともいえるが。

「状況はどうなっている?」

『順調です。陽動はうまくいっています。ほとんどの敵がガイアとランスロットに攻撃を仕掛けています』

画面に映るガイアが次々と無頼と横流しされたと思われるグラスゴーを撃破していき、ランスロットも躊躇いが見えていたが、敵を退けていた。特にガイアは破竹の勢いで進んでおり、解放戦線は無残にも機械の残骸ばかり量産していた。

「(原作よりも、敵のKMFの数が多いな) 別働隊は?」

『アスカ卿も部隊を率いて、すでに敵要塞の入口に迫りつつあります。この調子でいけば問題なく終わります』

「確かにそうだが、コロニーのガンダムが姿を見せていない以上、油断は禁物だ。だから、フラッグ部隊に待機してもらっている」

今回の作戦にユニオンが派遣してきた、フラッグ部隊は待機してもらっている。

ちなみにグラハムはプロトセイバーに乗っている。ソレスタルビーイングのガンダムに対抗するための機体を貸してあげましょうかと言ったら、すぐに返事をくれなかった。フラッグへの入れ込みが大きかったが、今回だけ、試しに乗ってみないかと薦めたら今回だけ試乗してくれた。

「グラハム殿。我が社が製造した機体はいかがかな?」

『素晴らしいの一言だが、フラッグにこの性能をつけられないかね?』

「フラッグはライセンスがわが社とは違うので無理です。大体基礎

フレームから違っていますから、一から作ることになりますよ」

今、次世代MSのコンペに向けて、ガンダムの実戦データをもとに量産型を開発中なのだ。フラッグのスペシャル機等作る暇はない。それにフラッグにガンダムの能力を上乗せするなど無理だ。

「気に入ったのなら、スタッフと共に御貸しできますが、いかがですか？」

『これが終わったら返事をさせてもらおう』

「わかりました。では、返事を楽しみに『コロニーのガンダムがガイアとランスロットの近くに出現しました』……わかった。モニカと共に迎撃に向かうとする……いや、予定変更だ。モニカはこのままグラハムの援護に向かえ」

「わかりました。ルルーシュ様は？」

「私は敵を制圧する。ここが落ちればガンダムも撤退するだろう」

コロニーのガンダムの元へ機体を動かそうとしたとき、待機していたセイバーの姿がないことに気づき、モニカを援護に向かわせることにして、自分は敵制圧に向かうことにした。向こうは所詮少数。目的が果たせないことがわかれば素直に引くだろう。

モニカはセイバーの後を追い、ルルーシュはアヴェインイージスから敵基地に向かって、ビーム砲撃を始めた。

「邪魔な連中は排除するまでだ。消えろ」

ビームライフルや腕等に内臓してあるビームマシンガンを連射して無頼や自走砲、戦車等を次々と打ち抜き、爆散させる。

凄まじいビーム攻撃の嵐に敵のアイコンが次々と消えていく。

「ふはははは！ ゼロシステムを改良した試作品を載せて見たが問題ないようだな」

アヴェインイージスの猛攻に対して、敵KMFが攻撃を集中させ始めたが、弾幕を掻い潜りながら腰に据えてあったビームサーベルを引き抜き一気に接近、敵KMF一機を真っ二つに切り裂き破壊した。そして、すぐに空中に飛び立ち、カドリユウス複層ビーム砲から大出力ビームを放ち、残りの敵をまとめて蒸発させる。

「ここらの敵はあらかた排除した。次に回る」

『ルルーシユ様。アスカ卿の部隊が敵施設に突入しました。歩兵も続けざまに侵入を開始。敵は基地を放棄する模様です。コロニーのガンダムは撤退し、こちらの被害は軽微です』

「そうか。ここでの戦闘も終わりだな。チエツクメイトだな」  
それから、20分後基地制圧が完了した。

戦後処理を行い、クロヴィスにそのことを報告して、必要な書類を送ると伝えたあと、東京租界に帰還した。

## 第六話

東京租界の軍港に戻ったルルーシュは艦の自室で情報端末を弄りながら休憩を取っていた。

艦のクルー達は現在休日を与えられており、租界に買い物へ出かけている者、艦の自室で休憩する者、格納庫で機体を弄っている者等様々だがルルーシュはやることがあるので自室で休憩という選択をしたのだ。

「疑似GNドライブとジnkスを保管している所をようやく発見した。南極にあることはわかっていたが、どこにあるかまではわかっていなかったらからなら。まさか、南極調査基地に偽装してあったとはな」

ルルーシュがこの場所を調べていたのは、秘密基地を襲撃して疑似GNドライブの技術奪取をするためだ。その為の作業員と部隊はすでに手配してある。

「監視者の素性と動きもすでに筒抜け、証拠も残ることはないしな。あくまでこの技術は私のみが保持するべきだからな」

破壊編終盤から疑似GNドライブ機が軍の主力となるので、この技術を独占しておかなければ会社の利益にならない。すでに必要な秘密基地のデータはわかっているの、適当にデータを吸い上げて、奪取した後は破壊するだけでいい。開発に携わった者もすでに始末、或いは襲撃と同時に抹殺するつもりでいる。少し残酷に思えるがテロリストを支援する者なので容赦するつもりはないし、世間的にも問題にはならない。

「何人かの技術者が蒸発したことにアレハンドロとリボンズは焦っているようだが、それでいい。奴らの眼を俺から逸らすことができる」

残った疑似GNドライブやジnkスは彼らの必要なものだ。そこを破壊すれば奴らの計画は頓挫する。だから、何としてでも死守しようとするはずだ。しかし、焦った二人が、急いでヴェーダを掌握する為に動き出すこともありえるので、カウンターとしてヴェーダを凌駕

する量子演算システムを完成させて、宇宙の拠点に配備している。ヴェーダに気付かれず、情報を収集できたのもこのウロボロスのおかげというわけだ。最もかなり金がかかったが、ソレスタルビーイングの活動でMS需要が伸びたおかげで穴埋めできたので社会的にも問題ない。

「もしもの時の準備は粗方完了しているから、焦る必要はないな。それよりも、リボンはすでに独自の行動を開始している方が問題だ。こちらに接触してくる可能性は62%か……万が一の為に交渉準備をしておくか。そのための情報を流す工作もしておくか」

ソレスタルビーイングに関係する施設を発見したら、その技術を手に入れたことの正当性を確保する為に流す情報は用意している。茶番劇に近いがヴェーダを掌握されていないうちに実行しないと、ばれる可能性があるので、急がなければならぬ。

「当面の問題はエルガン代表によりZEXISが結成されたことだな……シュナイゼルに参加してみないかと、数日前連絡が入ったときは予想していたとはいえ、驚いてしまった」

無論入るつもりなどないのだが、無理やり捻じ込まれてしまう不安があった。薦めてきたシュナイゼルの思惑はある程度想像できるが、自ら罠に入る込むわけにはいかない。

シュナイゼルの目的は俺（ルルーシュ）の動きを制限することだろう。そうすれば自分の腹を探られても行動に移すことが難しくなるから、奴にとってはいい時間稼ぎになる。なんせダモクレス建造の為に資金援助をしてもらっているが、何に使うかは誤魔化している状態だからだ。

「ZEXISに所属する機体の技術はほぼ手に入れてあるから問題ない。当初は接触が必要かと思っただが不要になってしまったな。それとラクシャータがこちらに来ることを同意してくれた。やはり、前回の作戦と予算攻撃が効いたようだな」

最も光子力エネルギーに関しては、特許が存在するのですぐに使用することはできない。使うにも高いライセンス料を払う必要があるので、そんなに機体等に組み込めないのだ。自分の能力を使えば可能

だが、あまりにも乱用していると怪しまれる恐れがあるのでさじ加減が難しいのだ。

だが、光子力エネルギーに関しては相変わらず交渉の成果は出ていない。軍事に利用されるべきではないと責任者が頑固に反対しているのではばらく様子を見ることになっている。

「ラクシャータが紅蓮の予備パーツを持って、こちらに加わった。苦労して交渉したかいがあった。紅蓮は予備パーツで組んだものを手土産として持ってきたようだ。この機体はカレンに乗せるか」  
つい先日、ラクシャータに関してはKMF部門に既に自分が作った紅蓮と共に加わった。紅蓮は先日この艦に運び込まれて最終調整を行っている所だ。前回のナリタ連山の戦いで、解放戦線が弱体化した結果、大規模な戦闘は起こりにくくなり、実戦データを取りにくくなったことが決定打になったようだ。

だが、予算もプリン伯爵とより2割増額で、別々にしてほしいと要望には、さすがのルルーシユも苦虫をかみ砕いた顔になった。KMFは需要が減少しており、あまり大金を出すと会社の部下から苦情がくるので、かなり悩んだが必要な予算だと割り切り了承した。だから、精々二人で競争に明け暮れてくれほしい。というか成果を出さなかったら罰を与えてやる。

「ラクシャータの件は解決したから目の上のタンコブが一つ減った。だが、計画や策を立てても思い通りにならないのは世の常だな。ストライク、デュエル、バスターを改良して量産できるように準備を進めているから、配備を勧めなければいけない。いずれも、疑似太陽炉を積む前提で開発させてあるし、スペック上ではアヘッドを上回るから莫大な利益に成るな」

この三機体は本来正規軍向けに量産機を開発する前提で試作機として製造した。だが、太陽炉を積み込めばアヘッドをスペックでは上回る用に設計してある。地球連邦が発足すれば軍需関係で儲けられるな。

その為にも疑似GNドライブ生産は独占しなければならぬ。地球連邦向けの軍需製品はなるべく売って利益を出したいのだ。



地球連邦が発足したら戦争が極端に減るから、儲けが少なくなる。やはり、兵器産業は利益が大きいから、新興企業にとつてはありがたい金づるだ。最も儲けるためだけに戦争を起こす気などないが、状況次第では会社から要望をされるかもしれないが。

「後ろ盾が多くない、俺にとつて金は立派な武器だからな。あればあるほどいい。精々世界中から金を塗り取ってやるさ」

ルルーシュは自分が強い立場にいるわけではないことを理解していた。庶民の血を引いているというだけで貶され、命を狙われたことは一度や二度ではない。その為の後援してくれる者も少ないのだ。だから、金で相手を釣らないといけないのだ。

「仮にギアスを手に入れても、迷わず使っただろうな……。原作ではなんで他作品キャラに非難されなきゃいけないんだ？」

それにしても他作品の原作キャラはルルーシュがギアスを使ったことを責めた者もいたが、ルルーシュの立場を考えれば使わざるを得ないと思う。だって、ルルーシュには信用でき、力のある人物がいなのだから。

そもそも、使える物は何でも使つて勝つのが戦争だ。それを実行したにも関わらず敵の言葉遊びを信じた味方に追放されたのだから、本物のルルーシュに対して、正直同情を禁じ得ない。

「戦争に綺麗ごと等ありえないのに勝つためにやったことを非難するとは……。まあ、自分ではどうしようもないことを考えても無意味だな。……まったく未来がわかっていても、実現には時間がかかる上、障害や問題も発生する。備えが大切だということを痛感させられるな。……準備は企業が安定に乗り出した時早めにしてあつたから書類仕事は少なくて済んだことが唯一の慰めだが」

自社の利益が上昇を続けていることはうれしいが、これからのことを考えると憂鬱だ。コロニーにはホワイトファンクがおり、OZにもスパイがいるという有り様だ。ブリタニア・ユニオン内にいるシンパはほとんど機密情報漏えいの罪で銃殺刑にして処理したのでこちらの情報が漏れることはある程度防ぐことができた。

他にもギジン星人やインベーダーの侵略、ムゲ、バジユラ等頭痛の種は山ほど存在している。

「こいつらの相手はZEXIISに任せるさ。俺はZEXIISと地球連邦の両方に物資を調達することで儲けさせてもらうだけだ。

それとブリタニア貴族への工作も順調だな。自分を暗殺しようとした連中に会社の利益を食わせてやっているのは忌々しいが、今は我慢だ。いずれ、まとめて消えてもらうためにもな。この借りは何100倍にして返してやるさ」

ルルーシュは憎悪に染まった顔で呟きながら愚か者の排除準備を進めていった。最も彼らはシュナイゼルが消すので復讐はできない可能性は高いのだが。

そして、ある程度区切りがついた後、自室を出てある部屋に向かった。

「遅かったな。マリアンヌはお前に女性に対する気遣いを教えなかったのか」

「黙れ、C、C。母の親友というから置いてやっているのだぞ。文句を言うなら不法侵入者であるお前は叩きだすところだ」

「つれないな。お前の仕事を手伝ってやろうと思ひ、来てやったのだぞ？ 少しは感謝してほしいものだな」

ルルーシュはC、Cの態度の眉を潜めるが、ぐつと堪えた。

C、Cになるべく来てほしくなかったルルーシュだが、修正力か何かか知らないがC、Cに会ってしまった。しかも、朝起きたら、自分の目の前で寝ていたの思わず大声で悲鳴を上げてしまい、それを聞いたモニカが駆けつけてきて、彼女は部屋を見た瞬間固まってしまい、状況を終息させるのに時間が掛かってしまったことを思いだし、思わず溜息が出てしまった。

C、Cの手伝いという言葉に少し殺意を抱いたがすぐに消した。そもそも、原作でC、Cがギアスの暴走を伝えておけば面倒事にならなかったことも多いのだ。人間には秘密にしたいことは確かにあるが、それでも限度がある。特に使用者本人の害になることぐらいは伝えておくべきだ。

最もC、Cとしては暴走してもらう必要があるので、一概に責められない側面もある。それにルルーシュが中途半端な対応をしなければ、防げたことなので怒っても仕方がないことだが。

「そうか。だが、お前には大人しくしていてもらうぞ。それと貴様が要望していたピザだが、少しならいいが、大量に注文することは却下だ。それが嫌なら出ていけ」

現在味方として微妙なこいつに金を無駄遣いしたくなどない。そもそも、ピザが喰いたかったら自分で作れと心の中で突っ込んだ。

「冷たい男だな。こんな美少女に頼まれたら引き受けるのが紳士というものだろう?」

「いきなり、艦に不法侵入する奴に紳士な態度を取る必要はない。牢屋にぶちこまれるのが望みなのか?」

C、Cの態度にルルーシュは辟易していたが、馬の耳に念仏だと思いい、口を噤んだ。

「それより、ピザを早く持ってこい。腹が減った」

「……お前にはランスロット2号機のパイロットをしてもらうぞ。いいな?」

「人使が荒いな。いいだろう、引き受けてやるよ。だからピザを持ってこい」

「次からはお前の給料で食べる!」

ルルーシュはC、Cのマイペースぶりに呆れながらピザを注文するのであった。

## 第七話

「紅蓮の調子はどうだい？」

「はい。問題ありません」

カレンは格納庫で新たに乗ることになった、KMF紅蓮の説明を受けていた。

基本操作は変わらないので、マニュアルを読んでこの機体の操作は問題ないが、これからのことを考えるといい気分になれなかった。

先日ナリタ連山の戦闘でKMFを駆り、同じ目的を持つ同士を消すことで、彼女の精神はかなり削れていた。あの時は自分と仲間が助かるためにはルルーシユに降伏して、見逃してもらうしかなかった。その判断はすくなくとも間違っていたとは思っていない。それに自分達が奪った物がルルーシユの捜索によって早期に発見されたことで、虐殺が止まったのも事実だ。

そして、何よりルルーシユという皇族の言葉には抗いがたい魅力があった。自分達には残念ながら独立を勝ち取る方法の道筋がお世辞にもなかった。そうでなくとも小さい活動を続けることに、疑問を感じていたことも拍車を掛けた。こんな調子で失った物を取り戻せるのかと。

ルルーシユの言ったことは現実的であり、実現可能であったことが彼の元で働くことを後押しした。だから、KMFパイロットを引き受けた。

だが、いきなり自分と同じ目的を持っている、解放戦線との戦いになるとは思っていなかった。自分の腕を疑っている周りを納得させるためか出撃命令が下され、陽動役を命じられた。

無論一人だけではなく、ステラという少女と組んでの出撃だった。それに無理をしなくてもいいと言われ、自分達の判断で後退タイムイングも任せると言われたので、少なくとも使い捨てにするつもりはないとわかったので内心安心もした。

だが、ランスロットで出撃して、無頼という国産と思われるKMFや自走砲をMVSで切り裂いて破壊することは自分が戻れない決断

をしたことを意味した。ブリタニア・ユニオン軍の最新兵器に乗り、自分と同じ志を持つ者を殺す。グループのみんなにも言い訳などできなくなったことを理解したとき、思わず笑ってしまった。

しかし、ある程度踏ん切りがつくと、何としてでも出世して国を取り戻すという決意を固めて命令を遂行した。もう自分には引き返すことなどできないのだと言い聞かせ、カレンは混沌とする多次元世界を生きていくことを心に誓った。

「その為にも紅蓮……これからよろしくね」

コクピットでそう呟きながら、訓練開始を待つのであった。ちなみにカレンが紅蓮に乗り換えをしたのでランスロットはロイドと相談の結果、C、Cではなくモニカに与えられることになった。

そのランスロットを譲り受ける形になった、当事者であるモニカはというと、カレンにかなり対抗心を燃やしていた。

モニカはルルーシュの方針でMSとKMF両方を乗りこなせるが、専用のMSはあってもKMFはグロースターのカスタムモデルを使っていた。だから、ランスロットが来たとき当然自分に与えられるのだと思っていた。しかも、ルルーシュは既に自分専用のKMFをガウエインにする予定だったので、ランスロットには乗る気はないのだろうと考えていた。

だが、ランスロットは自分ではなく、新兵のカレンに与えられた。彼女は名門であるシュタットフェルト家御令嬢なので身分は問題なかったが、それでも不満があったのは事実だ。ルルーシュ殿下にMSがあるからKMFは後回しにしてくれないかと頼まれなかったら、絶対抗議をしていた。

折角諦めることにしたのに、新しい技術者と共に新たな新型KMFが配備されて、カレンがそちらに移り、ランスロットがいつの間にか自分の所に回ってきたが、御下がりを買ったような感じがした。

「でも、ルルーシュ様がお決めになったことだし、文句を言っても始まりませんか……。元ナイトオブブラウンズの実力を見せつけてやるまでです。そして、何よりルルーシュ様の騎士として後輩に負けるわけにはいきません」

モニカは後からやってきたカレンに、先輩騎士として、騎士とは何か見せてやらなければと、気合いを入れ直し、ランスロットがある場所に向かった。

一方ルルーシュは、暁の牙の拠点を討伐するという名目で、アレハンドロがジンクスや疑似GNドライヴを隠している拠点を襲撃することになっている部隊と連絡を専用機の中で取っていた。

『今夜、予定通り行います』

「証拠は絶対に残すな。当初の作戦通り、必要な物を奪取したら跡形もなく吹き飛ばせ」

ルルーシュは特殊部隊に命令を下し、通信を切った。

特殊部隊による敵拠点制圧及び、技術奪取は問題なく行える。この作戦の為にネブラブリッツを三機、ブリッツ量産型を10機も用意したのだ。失敗されては生産コストが高めになるガンダムタイプを大量に作った意味がなくなる。量産型の方も、コストが割高なブリッツを簡略しかタイプのせいとか、量産機の割には結構出費が掛ってしまったことが頭痛の種であった。

この作戦の問題点は疑似GNドライヴを奪われたとき、アレハンドロがどういう行動に出るのだが、そっちの方は臨機応変に対応するしかないという。ルルーシュは割り切っていた。

「それよりも、エルガン代表が俺を呼び寄せるとは……。大方ZEXISの件だと思いが何をやらせる気だ？」

ZEXISは未来を知るエルガンが未来の問題に対処する為に生み出した軍組織といえる。そもそも、世間ではテロリストと呼ばれる組織を外部部隊とはいえ、正規軍の一員に組み込む等普通はあり得ない。下手をしたら国際問題になり、エルガンの首もあぶないはずなのに、彼らを組み込みZEXIS結成を強行したのだ。

普通はあり得ない暴挙と云えるが、それもある程度未来を知っていたのなら納得できる。そのおかげで原作で諸々の問題を全て片づけることができたのだから、この目論見は成功したといえるだろう。

しかし、ルルーシュはもつと穏便な方法でもよかったのではないか

と考えていた。ソレスタルビーイングが表舞台に出る前に勧誘するとか、ルルーシユを援助して、黒の騎士団結成前に真実を教える方法を売ったはず。最もエルガン代表としては自分が知っている未来が変わってしまっはまずいと思ったのかもしれないが。

「エルガン代表が何を言ってくるかわからないが、お前の思惑に乗せられるほど甘くはないぞ」

ルルーシユが色々と考えて要るうちに専用機は空港に到着し、降りて手続きを取ったあと、迎えの車に乗り、国連本部に向かった。

## 第八話

国連本部の一室で二人の人物が向かい合っていた。

一人は若干17歳ながら、本人の身分と能力、そして、金の力でブリタニア・ユニオン軍内で大出世を果たしたルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

もう一人は見た目は60歳以上だが、実際は300歳以上と思われる国連代表エルガン・ローディック代表。

「私をこんな場所に呼ぶとは何用ですか、エルガン代表？」

疑似GNドライブの確保作戦『オペレーション・GN』だけでも忙しかったのに、ガンダム鹵獲作戦が三大国家間共同の軍事訓練の名目で立案されたので、それに必要な物資の準備や、作戦の考案等を練っている。最近では寝る暇もぐらい忙しいのに、こんな場所に呼び付けたエルガン代表に心の中で恨みを言いつつ、自分に何の用なのか尋ねた。

「実は此度、人類の敵と戦う為に新たな国連の外務部隊を結成することになった」

「そうですか。わざわざそんなことを知らせる為に兄を使つてまで呼びつけたのですか？」

シユナイゼルがエルガン代表に会ってくれという要請がなければ、この忙しいときに国連のビルまで来るつもりなどなかった。この作戦に参加命令が下された上、必要な物資の確認までさせられているので、ここ数日は書類と睨めっこばかりしている。

「君を呼んだのは他にもない、ZEXISに参謀として参加を要請するためだ」

「申し訳ありませんが、辞退させていただきます。私は今の仕事で手一杯なのです」

ルルーシュは破壊事変でZEXISに参加しても何の得にもならないので、丁寧に断った。ただでさえ忙しいのに、そんな面倒な部隊に参加したら、宮廷の貴族共に攻撃材料を与えてしまう。

「ZEXISに関して詳しい話を聞いていませんし、メンバーも代



表が独自に集めているらしいですね。今のメンバーだけでも充分なのでは？」

指揮官はジェフリーがいるし、戦術等を考えるスメラギは元気に健在だ。おまけに所属する機体は化物ばかり。正直いつて過剰戦力だし、それが命令を聞かなければならないが、国連の許可の元、国家相手に好きな様に暴れまわれるのだ。原作の三大国家の警戒する気持ちもわからなくもない。

「君がどこまで把握しているかは聞くつもりはないが、君の様な人物が参加してくれるのなら、私も安心できるのだ」

「……エルガン代表。あなたなら、私の立場はよく理解できると思いますが？」

ルルーシユはエルガン代表が、しつこくZEXIS参加要請をしてくるので、宮廷内の自分の立場を強調して断った。

エルガンはルルーシユの態度を見て、今回の勧誘はこの程度にすることにした。彼の存在はZEXISには欠かせないと思っただけで、これからも説得は続けていくつもりだが、この情勢ではゴリ押しすることは難しいと判断したからだ。それに策がないわけではないので、その時にまた、改めて要請すればいいと考えたからだ。

「わかった。今回は諦めよう。だが、君がいい返事をくれることを待たせてもらおう」

「そうですか。では、失礼させていただきます」  
ルルーシユはエルガンに礼をして、扉から出て行った。

南極大陸では、疑似GNドライブ奪取と施設の破壊を行うための部隊が、奇襲をかけようと待機していた。

機密性を重視して作戦は夜中に行われることになっていたので、部隊はそれまで海中で待機していた。

『準備はどうだ？』

「いつでも」

『よし。作戦開始だ』

「了解」

ルルーシユの作戦開始命令が出され、MSが収容可能な潜水空母艦は海中から海面へ浮上し、破壊工作と奇襲用に作ったネロブリッツとブリッツ量産型、特殊部隊が出撃した。

この機体はミラージュコロイドに加えて、機体から強力なジャマーを放出することで飛行していても、探知されにくい。この作戦だけに改造を施した機体なのだ。

「状況は？」

「すでに先行の工作員が敵の通信やレーダー網を遮断しています。それと突入ルートを転送すると」

「わかった。揚陸が済み次第、歩兵は突入。MS部隊は敵を逃がすな」

ブリッツがビームサーベルで入口を破壊し、扉を強引に開けて侵入を開始した。

即座に施設にある警備用MSと脱出用の船をビームで破壊していき、敵の逃走手段及び、戦力を無力化していく。

施設内にいた人間はいきなりの奇襲攻撃でパニック状態陥り、対した反撃ができずに排除されていく。

「ぎゃああああ!! 熱い! 熱い!」

「足を撃たれた! 誰か助けてくれ〜!」

そんな悲鳴と怒号の中、部隊は敵施設のデータを消去したあと、爆弾を設置してその場を後にした。

一方施設の物資を搬入するドックに侵入した潜水空母三隻は、部隊が奪取してきたジnkクスと、疑似GNドライヴの積み込みを行った。た。

「全部積み込むまで、あとどれくらいかかる?」

「あと、20分で終わらせませす」

「そうか。この作戦は時間厳守だ。間に合わない場合は残りの物は破壊する」

「わかりました」

作戦を指揮する司令が参謀にその様に言い、参謀はその旨を部隊に

通達するように、通信士に命じた。

「全ての作業を完了を確認しました。部隊も全て収容完了」

「よし、離脱する」

潜水空母三隻は、その身を海中へと姿を消した。

その数分後、仕掛けて置いた時限爆弾が爆発して、施設は瓦礫の山と化したのであった。

ルルーシユは国連本部から空港に戻り、すぐに自分の艦に戻り、書類の処理を終えた後、襲撃結果を聞いて、満足していた。

「そうか。成功したか」

『はい。ルルーシユ様が仰った通り、ソレスタルビーイングの施設であることは間違いなかったようです』

「証拠も確保しただろうか？」

『はい。これなら、施設を攻撃したことがばれても問題ありません。何せテロリストの拠点ですから、どこも文句は出ないでしょう』

これで、地球連邦が発足したとき、大きな発言権を持つことができ、何せ軍事力の源を生産することができれば、逆に連邦に圧力をかけられる。いつの世でも政治には軍事力と金が絡むのだ。

「潜水空母が社に帰還したら、すぐに奪ったデータを元に疑似GNドライブとジンクスの量産を開始しろ」

『わかりました』

ルルーシユは通信が切れたあと、ソファにもたれて胸をなで下ろした。

この作戦に金と時間をかなりかけていたので、失敗すれば察知されて、会社がトリニティに攻撃される可能性が高まるから恐れがあったからだ。

（第一段階は成功したな。これでアレハンドロとラグナは焦ってトリニティ投入を早めるだろう。そしたら、ソレスタルビーイングの基地を襲撃したことを発表しジンクス投入できるな）

政府に恩を売れる上、会社の利益になる。アレハンドロやラグナは何か言ってくる可能性はあるが、リボンスは何もしないだろう。二人のことを捨て駒と思っているし、疑似GNドライブを製造するのは誰でもいいと思っっているだろうから。資金援助等は受けていたことを見れば、MS製造等は大部分を任せていたと想像がつく。

「取り敢えず、エルガン代表のお手並み拝見だな」

河口湖の事件がZEIXIS最初のお披露目になるはずだ。ルルーシユはここで黒の騎士団名声を高めたが、この世界ではそれは起こらないので、秘密裏に処理されるとみていた。

## 第九話 河口湖事件 前篇

河口湖のサクラダイトの分配会議はゼロと黒の騎士団、そしてZ E X I Eの活躍で人質はほとんど無事解放されて終結した。それが原作でのこの話の内容だが、この世界では違う結末になる可能性になると予感したのは、クロヴィスから連絡を受けたときだ。

「人質をどう救助するべきかですか？」

『ルルーシュ、お前でも思いつかないのか？』

「私とて万能ではありません。それにまさかユーフェミアがいるなんて聞いていませんでしたので。事前にそのことを伝えてくれれば、いくばか対応できたのですが……」

ルルーシュはクロヴィスから今回のテロにどう対応すべきか、相談を持ちかけられていた。

一般市民だけなら、いつも通り、テロには屈しないと宣言して、すぐに軍を突撃させて解決するのだが、今回はいつも通りにできないでいた。

それは異母妹であるユーフェミア・リ・ブリタニアが会談が行われるホテルに滞在しており、人質の中にいる可能性があるからだ。もし、彼女の身に何かあれば姉であるコーネリアに恨まれ、何を言われるかわかったものではないからだ。その為、クロヴィスは頭が切れるルルーシュに秘匿回線どう解決すればいいか、アイデアをもらうべく相談を持ちかけたのだ。幸い、ルルーシュとユーフェミアは異母兄妹の割には、仲がとてもよかったので、見捨てる策は提言しないと思っていた。

（策を授けて失敗したら、俺のせいになるだろうが！ お前の失策をそこまでして助けてやる義理は俺にはないんだよ！）

だが、クロヴィスは勘違いしていた。今のルルーシュには原作以上に兄弟姉妹を大切にする気持ちなどほとんどなかった。無論できれば助けたいという気持ちも僅かにあるが、それでテロ鎮圧に失敗したら元も子もない。そうなれば、策を授けた場合、それをクロヴィスの後援貴族共に利用されて、人質を助け出せなかったのは、「ルルーシュ

殿下の策のせいだ」と口を揃えて非難し、本当に元凶にされかねないからだ。

(最も強硬策で解決しても、国策的には問題ないけどな)

ルルーシユは国是に従って事件を強硬策で解決すれば、ユーフェミアに何かあっても実姉であるコーネリア以外は左程気にしないだろうとも考えていたが。

父であるシャルルに至っては「進化の為に必要な犠牲である!!」とか素面で言いそうだ。原作のクロヴィスの時もそんな感じだったし。

「取り敢えず、時間を稼いでください。国連から派遣される特殊部隊が何か策を持っているかもしれない」

『それは困る！もし、そうなれば私の統治能力に問題があると責められてしまう！』

「兄上の権力ならもみ消すのは容易いでしょう……。兎も角、人質を解放するように交渉して、時間を稼ぐしかありません。だから、ユーフェミアがいることを悟られないようにしてください」

ルルーシユはそう言つて、通信を切った。

「総督がクロヴィスのままだから、ユーフェミアが人質に取られることもないと安堵していたが、まさか、お忍びでパーティーに参加していたとはな……」

この世界ではコーネリアが総督として赴任していないから、ユーフェミアが参加する要素が皆無なので、てっきり人質は一般人だけと思っていたのだ。それがまさか原作通りになってしまったことに、ルルーシユは頭を抱えた。当初は要求を断ってそのまま突撃して一気に制圧する予定だったのだが、作戦を練り直すはめになってしまった。

「モニカ。様子はどうか？」

『現場は未だに睨み合いが続いています。それと数人の人質が窓際の近くにいます。その内の一人は女性ですね』

原作通り落とすつもりなのだろうと悟ったが、どうすることもできない。要求を呑むことは論外だ。しかし、ユーフェミアがいることがばれたら面倒事になるのは目に見えている。投降を呼びかけて稼

げる時間もそうは長くない。

「……モニカ。万が一に備えて、いつでも突入できるようにしておけ。兄上が突撃指示を出し次第、ビルを制圧する」

『ルルーシユ様!? 本当によろしいのですか!?!』

ルルーシユの指示にモニカは驚愕する。少なくともルルーシユとユーフェミアは周りから見れば仲のいい兄妹だ。ルルーシユもユーフェミアを大切に扱っていたし、ユーフェミアも兄であるルルーシユをかなり好いていた。

そのルルーシユが、ユーフェミアを見捨てるような発言自体が出たことに、さすがのモニカも耳を疑ってしまったのだ。

「万が一の時だ。私は滞在はしているが、命令権は兄上にあるから、そのような状況になったら、文句を言っても覆らないからな」

『……わかりました。マユとカレンにも準備するように言っておきます』

「それと荒事になったら、お前のランスロットの出番だから、ロイド達に念入りに調整するように言っておけ。私も先日届いたKMFに搭乗してそちらへ向かう」

『ガウエインですか？ あれはまだ、改造中だったのでは?』

ルルーシユが言っているKMFガウエインは無論モニカも知っている。この機体は元々特派が実験機として開発したもので、ルルーシユが稼動データを提供するという条件で、元特派から譲り受けたものだ。しかし、この機体は実験機としての側面が強い上、搭載しているドルイドシステムは常人には扱えない代物なのだ。戦闘をこなしながらこの機能を使うのは熟練パイロットでも難しく、複座式を採用することでその機能を発揮できるように設計されていた。

「5日前に改造が終了して、今日届いた。届いてすぐに調整と整備を命じたおかげで、出撃準備はすでに完了している。俺が現場に着くまでは待機している」

『イ、イエス・ユア・ハインス』

ルルーシユはモニカへの通信を切った。

(俺もできれば助けたいさ……)

ユーフェミアは自分を進んで排除するような類ではない。だから、できれば助けたい。それに皇族に復帰してからは必要以上に気にかけて結果、情が移ったことも否定できない自分もいる。何より、自分を素直に心配してくれる人物だ。いずれ自分の助けになる可能性もある。

ルルーシュは感情と理性が内心で揺れ動きながら、格納庫に行き、ガウエインに搭乗した。

「先に行く。発進シークエンスを開始しろ」

「わかりました。IFX-V301ガウエイン発進シークエンスを開始します」

ガウエインがクレーンで移動し、カタパルトに乗せられる。

「カタパルト固定を確認しました。ハッチ解放完了。いつでも行けます」

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア出るぞ」

ガウエインがカタパルトによって加速し、ハッチから飛び出た。

KMFで初めてフロートユニットを搭載した機体が大空を飛行し、空を舞う。

「フロートユニット正常に起動。機体制御問題なし。武装異常なし。ドroidシステムも問題ない。このまま河口湖ホテルまで向かう」

ルルーシュは機体を河口湖の方へ向け、最高速度で現地に向かうことにした。無論その分エナジーを食うので一瞬迷ったが、現地になったら交換すればいいとすぐに結論づけて、ガウエインのスピードを最大まで上げるのであった。

「ギアスによる人質解放は無理。だからといって、それ以外の手が思い浮かばない……ハドロン砲でテロリストを全員を吹き飛ばしてしまえば楽なのだが……」

ルルーシュは一瞬非情な手段が頭に浮かんだが、ユーフェミアの笑顔を思い出して、その考えを頭から追い出した。

確かに原作のルルーシュより甘くはないし、邪魔をするのなら仲が良かったユーフェミアでも容赦なく排除する覚悟はある。しかし、



ユーフェミアは今の所自分に迷惑をかけていないし、宮廷では一応数少ない味方だ。今、消えると自分の不利益になる可能性が高い。それに見捨てたとなれば姉であるコーネリアが何を言ってくるかわからない。

「侵攻ルートはここだけか。第一次突入部隊は失敗に終わったようだな。急がねばならんな」

ルルーシユはガウエインの広めなコクピットの中で策を練りながら、現地へと飛んで行った。

## 第十話 河口湖事件 後篇

ルルーシユがガウエインで河口湖へと向かっている最中、現地では動きがあった。

ホテルへと通じる地下通路をKMFで突破する作戦が決行されたが、解放戦線はそこに砲台を設置して迎え撃ったのだ。その砲撃と通路の狭さが相まって突入は失敗。KMFも大破してしまったのだ。

「突入作戦が失敗しましたか……。恐らく人質はただではすみませんね」

「そうだね。要求にも応じてないから、下手をすれば人質の命が危ないね」

「ロイドさん！」

モニカが作戦が失敗したので、相手側に何かアクションがあると言いつつ、ロイドも暢気に頷いた。しかし、あまりにも軽い言い方に、セシルが怒声を上げて止める。

「それよりもガウエイン早くみたいなく♪ ハドロン砲を集束できなみたいただからね。僕が完成させるつもりだったのに……」

ガウエインのハドロン砲を完成させるための研究もしてきたが、後から入ったラクターシャにあっさり集束させられてしまい、その光景を思い出したロイドは落ち込んだ。

セシルはそれを見て思わず苦笑したが、すぐに真剣な表情に戻った。

「ロイド伯爵、緊張感がなさすぎです。調整の方は進んでいるのですか？」

「僕のランスロットはいつでも出撃可能だよ」

「そうですね。では、私もコクピットで待機しますね」

「了解しました。……時間がありませんので最終調整を行いますね。何分試作機ですから……」

「お願いします」

モニカはランスロットに乗り込み、ロイドとセシルは最終調整を始めるのであった。

「河口湖まであと少しか……」

ルルーシユはガウエインの中で、ホテル内部構図と周辺の地形を見ていた。

人質を助け出し、テロを鎮圧するには原作の地下通路を使うしかない。しかし、突破するのは容易ではない。

（どうする？ ZEXISに任せてしまえばいいか？ だが、人質はゼロの活躍で救いだされた。ZEXISの奴らもさすがにホテルへ侵入することは不可能だ）

先に解放戦線の最重要拠点を先日叩いてしまったせいも、原作よりも敵の数が多ったのだ。その為、出入口等は完全に封鎖され、外から中に侵入することはコードギアスの原作以上に不可能になっていた。

「考えたことをしていたら着いてしまったようだな」

ルルーシユは現地に到着したので、ガウエインをロイド達がいるトレーラーの側に着陸させた。

「ルルーシユ殿下。これが改造していたガウエインですか!？」

「ああ。取り敢えずエナジーの交換を頼む。ところで状況はどうなっている?」

「膠着状態です。ルルーシユ様が仰っていた国連から派遣された部隊が、来たようですがその前に人質が何人か犠牲になりました」

「……わかった。その部隊が動けば状況が動くだろう。そしたら、もう一度地下通路突破を試みる。突入するのはランスロットだ。できるなモニカ?」

「イエス・ユア・ハynes」

ルルーシユはZEXISが動きだしたら、それに呼応して一気に事件を解決するため準備を始めた。

「なぜ、仕掛けない? 奴らの戦力なら人質解放も難しくはないはず……」

ZEXISは現場が到着してしばらく経ったが、彼らに動きがなく、未だに状況は変わっていないかった。その様子を見たルルーシュはガウエインのコクピット内で若干焦り始めた。

(やはり、ギアスでないと人質解放は無理だったというわけか……。立て籠もっている側もそろそろ焦れてくるはずだ。何か要求を増やしてくる可能性は高いが……)

ユーフェミアの正体がばれているなら、交渉材料にしてくるはずだ。だから、次に何か通達してきたときその旨を伝えることは予想がつく。しかし、それはあくまでばれていた時だ。

「ユーフェミアの安否は？」

「未だわからないそうです」

ルルーシュの言葉にセシルが不安そうな表情で答えた。

『ルルーシュ様。埒が明かないので私が地下通路を突破しましょうか?』

「作戦を早めるべきか……」

ランスロットに乗って地下通路で待機しているモニカから進言が入った。

モニカの言う通りこのまま睨み合っても時間の無駄だ。だが、クロヴィスから許可を貰わない限り、強行突破はできない。

あれこれと頭の中で考えて要る時、セシルから連絡が来た。

「ルルーシュ様! 例の国連から派遣された部隊が動き始めました。それに対しての動きなのかクロヴィス殿下もついに強硬手段を取る用に命じたようです」

「ついに動いたか。モニカ! 作戦開始だ!」

『イエス・ユア・ハインネス!』

ルルーシュはクロヴィスが行動を起こすのは、ZEXISが動き始めたときだと考えていた。この事件を国連の部隊に鎮圧されれば、自分の不手際を責められる可能性が高いからだ。クロヴィスにとってそれだけは避けなくてはならない。そんなことになれば総督を首にするのは目に見えているからだ。

「ルルーシユ様!? 人質はどうするのですか!?!」

「今は国連が派遣した部隊に期待するしかない。今は地下通路突破が優先だからな。私はガウエインで直接ビルの上階に向かう。何かあったらすぐに報せろ」

ルルーシユはセシルに必要な指示を命令したあと、ガウエインを発進させた。

「どうやら、ZEXISが人質解放に動き出したようだな。そちらは任してもよさそうだな」

ルルーシユはドルイドシステムでテロリストの通信機の会話を傍受していた。生身でも強い連中が突入して、人質を解放する作戦らしい。

『ルルーシユ様! 地下通路突破完了しました!』

「そうか。人質もどうやら解放されたらしい。あとは敵を一掃するだけだ」

ルルーシユはセシルから地下通路突破報告を聞きながら、地上に展開しているMSやKMFの動きを見ていた。テロリストにしては結構な数の兵器を見て眉を潜めるが、WLFに資金提供している黒幕はわかっているのでここで気にしていても仕方がないと思い、ハドロン砲を敵KMFに向けて放った。どす黒い光は地上にいた敵機動兵器を複数一気に破壊した。

「ハドロン砲は完成したようだな。これも先行投資のおかげだな」

ルルーシユは高い金を払って、早めに技術者を囲っておいた成果が、早くも出たことに満足しながら敵MSやKMFの銃撃を回避しつつ、スラッシュハーケンやハドロン砲、そして腕に増設したヴァリスを地上に連射しながら敵機を破壊していく。敵のヘリが銃撃やミサイル攻撃を加えてきたが、それをブレイズルミナスを展開して防ぎ、隙ができたところで接近してコクピットにMVSを突き刺し破壊した。

敵討ちのつもりなのか今度は編隊でやってきたが、ハドロン砲を撃ちこんで何機か撃墜して編隊をばらし、指先のスラッシュハーケンを

放ってへりを串刺しにして捕獲し、他の敵機にぶつけて破壊した。

しばらくして、ZEXISのMSやスーパーロボットも出現し、敵はあっという間に沈黙していったのであった。こうして、河口湖の事件は終息したのであった。

## 第十一話

河口湖の事件が解決し、ルルーシユは租界にロイド達が持ち込んだトレーラーと共に帰還したが、休む暇もなく書類と戦うはめになり、それが終わり休憩をしようとしたら、本国からプライベート通信が入った。

「コーネリア姉上ですか。何の用ですか？」

『久しぶりだなルルーシユ。そう固くなるな。私は今度クロヴィスの補佐として、副総督に任命されることになったからな。お前の方から現地の情勢がどんな物か聞いておきたいのだ』

コーネリアはルルーシユの少し硬い言葉に苦笑しながら、ルルーシユが忙しいのは知っているので簡潔に要件を伝えた。

「どうやら、クロヴィスを補佐する為に敵の規模や、治安状況等がある程度把握しておきたいらしい。ルルーシユはそこで自分が知る限りの情報は送ると言い、自分の意見を言った。

『わかった。お前も宮廷の雀共には気をつけるのだぞ。最近、何の為に使うのかわからない資源と金を集めているらしいからな』

「姉上も気を付けてくださいよ」

話し合いが終わり、コーネリアは最近一部の宮廷の貴族連中がルルーシユの身を心配して、気を付けるように改めて注意した。

ルルーシユもコーネリアを一応心配している振りを演じて、注意するように釘を刺し、通信を切った。

（宮廷の貴族共が資源と資金をかき集めているだと？ シユナイゼル一味ではない連中がなぜだ？）

ルルーシユは一部の宮廷貴族達の動きを不審に思い、スパイに命じて密かに調べるように命じ、自らも調べられる範囲で調査することにした。

（アレハンドロが本格的に動き始めたか。……うん？ リボンズに新たな協力者だと？）

アレハンドロがトリニティを動かす準備を始めていると報告書が届いた。そして、最近もう一人の謎の男がリボンズの仲間になったこ

とが書いてあり、詳しい素性は調査中らしいが、かなり有能な男だと書いてあったので、自分の存在のようなイレギュラーが発生したと察し、徹底的に調査するように命じた。

「ZXEISが砂漠にあるテロリストの拠点を壊滅させたようだな。そのあと予定通りに三勢力の軍が襲いかかったが、コロニーのガンダム01が自爆。その隙に撤退したようだな」

ルルーシュは最後に三大勢力間の砂漠で行われた、演習結果の報告書類を、満足そうに見ていた。そこには自分が密かに派遣してデータ収集を行う部隊からの報告もあり、ZXEIS部隊の機体データや戦闘の様子が書れていた。

（プロトセイバーの実戦データもほぼ集まったし、この世界のガンダムにどれだけ通用するか確認することもできたしな。成果としては充分だろう）

ユニオンのMS部隊にはガンダムの試作機を数機派遣していた。

グラハム中尉に貸し出したプロトセイバーは、基本原作と同じな形で活動時間に限りがあるから、そのテストも兼ねて派遣した。できるなら核融合炉にしたかったが、この世界の核へのアレルギー反応は強いのでテスト機を製造するにあたっては諦めざるを得なかった。

もう一機に関してはテストする前にZXEISが撤退してしまい、運用データ自身が集められなかったことが記されていた。

ルルーシュは今回の結果は及第点だなどと結論し、エルガン代表やりボンズ・アルマーク、グレイス・オコナーを出しぬくべくさらなる準備をするように部下に命じた。

アレハンドロはコーナー家が密かに開発していた、ジンクスと疑似GNドライブを奪われ、そのことに大いに焦った。この二つは自分が新たな支配者になるために必要な物であったからだ。しかし、自分用に開発していたMSは無事であったことと、リボンズがヴェーダの位置を探索している（無論うそであり、リボンズは場所を知っているが教える時期ではないため黙っているだけ）ので、大した問題ではない



と考えたのであった。

（リボンズがいるし、あの男もいる。私の計画に抜かりはない。コーナー家の悲願は必ず果たして見せる！）

計画を前倒しする必要があると判断し、リモネシアのシオニーが提案してZ X I E S 殲滅作戦を利用することを思いつき、ラグナ・ハーヴェイにトリニティ投入するように命じることにした。それとあの男から頼まれた専用MS開発を命じておいた。

「世界を支配するのはこの私、アレハンドロ・コーナーだ！」

アレハンドロは自分の優位は揺らいでいないと言い聞かせ、この世の覇者となるべく行動を加速させることにした。

（まったく、愚かな男だね）

リボンズはヴェーダ搜索する振りをアレハンドロの家でしながら、アレハンドロを内心で嘲っていた。

イノベーターである自分がこんな小者に素直に付き従っているのは、単純に利用価値があるからだ。それすらなければ、人間の中でも特に救いようがない部類の者などとつくに見限っている。最近同士に加わったあの男も自分と同じ評価をアレハンドロにしていたことを思い出して、さっさとこの男の元から離れたいと改めて思ったのだった。最も彼自身はアレハンドロのことを嫌ってはいないが、器の大きさは彼以下である。そのことに気付いていないので、ルルーシユはリボンズをかなりバカな人物だと評価している。

（あとはヴェーダを早めに掌握して手駒を増やさないといけないな。ヴェーダを移す場所はすでに準備ができています）

イノベイト生産はすでに始めているが、調整が完了していないのでまだ手駒としては使えない。あの男はコロニーの反攻分子とコネを作る為に動いているので、合流は当分かかると連絡があった。

（奪われた疑似GNドライブは王留美に搜索させている。最もその者が生産を独占してもいいけどね）

自分は指導者であって、利益を追求する経営者ではない。その様な

ことは、人間に任せておけばいいと考えて要るリボンズは、あまり結果を気にしていなかった。そして、調査はかなり難航したが、ルルーシュが確保していることを知って、彼と接触することにしたのであった。

「愚かな人類は導く存在が必要だ。その役目を果たせるのは僕しかない」

リボンズはこの世の指導者となるべく行動を開始しようとしていた。

一方Z X I E Sは謎の男アイムから、W L Fの本拠地がリモネシアにあると聞き、その真偽を確かめるべく、リモネシアに舵を切っていた。

「エルガン代表は一体何を考えて要るのかわからないわ……」

「そうだな。だが、彼のおかげで正規軍と戦闘になっても罪にならない以上は仕方があるまい。我々は今はW L Fを叩くことに専念すべきだ」

Z X I E Sの指揮官でソレスタルビーイングの戦術予報士スメラギと、マクロスクォーター艦長ジェフリー・ワイルダーはエルガンへの疑念を抱いていた。しかし、彼のおかげで正規軍と戦闘になっても罪にならないことは事実なので、この話をジェフリーは早々に切り上げた。

「それよりも、エルガン代表が推薦したい指揮官がいると言っているが、未だに合流する気配がないな」

「彼が言うには非常に有能らしいです。最も若すぎるらしいから、疑問に思いかもしれないとも言っていましたね」

エルガン代表から、いずれもう一人有能な指揮官を派遣すると、二人は聞いていたが、未だにエルガン代表がその者の詳しい素性を話さないの、疑念が湧いていた。無論通信をしてきたときに一度訪ねたが、その者がなかなか首を縦に振らない上に、ばらしたら報復すると脅されたから言うわけにはいかないと返事をされたが。

「あまり、どうなるかわからないことで文句を言っても仕方がないわ。今はWLFを優先します」

「確かにそうだな。我らは目の前の問題を片づけて行こう」

会議に参加している面々も頷き、当初の予定通りに行動することになった。

## 第十二話

リモネシアにて大時空振動が発生。そして、しばらくして、新生インペリウム帝国が建国宣言と全世界に宣戦布告を行った。その為世界は大混乱に陥り、各国は対応に忙しいようだ。

その後、宇宙と地上に別れたZXEISは同じ多次元世界からやってきたZHEUSという連中と合流したらしい。最も俺ルルーシユにとつてはどうでもいいことだが。

「戦力が増強されてよかったですね。エルガン代表」

『……ルルーシユ君。君は私が嫌いなのか？ 君の恨みを買った覚えは正直ないのだが？』

エルガンはルルーシユがいかにも嫌そうな顔して、自分に対応しているのを見て思い切つて尋ねてみた。彼をなかなか勧誘できないでいるので、そのヒントになるかもしれないと思つたからだ。

「御自分の胸の内に効いてください。用件は何ですか？ 無論例の件ならお断りさせていただきますよ」

『……君に頼みたいことはZXEISの機動兵器の予備パーツを融通してほしいのだ。君の会社はMSに関してはかなりの種類の予備パーツがあつたはずだ』

ルルーシユはエルガンの要望に眉を潜めた。修理のためのパーツ等を提供するぐらいなら別に問題はない。そろそろ、エルガンの要望を一つぐらい聞いておかないと、印象が悪くなってしまうと考えていた。だが、C、E系のMSは軍に試作タイプを公表しているので予備パーツ等があるのに対して、U、C系のMSの製造は月面都市にある秘密工場で生産しており、それらの機体を組み上げたことはない。倉庫にパーツ状態にしているから知られることはないはずなのだ。ルルーシユはそれがばれていることに内心焦つたが、それを表に出さずに交渉を続けた。

「わかりました。国連がそれを買取つたという形にして提供してください」

『わかつた。すぐに手配してくれ。彼らは激戦に次ぐ、激戦なのだ。』

物資が豊富にあることに越したことはないのだ』

「すぐに手配しましょう。詳しいリストを本社に送っておいてください」

ルルーシユはその事実を手に入れていたエルガン代表を、まだ舐めきっていた自分の迂闊さに内心舌打ちし、それを表に出さない様にしてエルガンの要望に応えると返事をした。

エルガンが通信を切ったあと、すぐに本社に連絡を入れて、国連に送る物資を用意するように命じ、疑似太陽炉量産準備ができたかどうかの確認も行った。

「それと月面都市で働いている者達を一人残らず調査しろ。エルガンや彼に親しい人物に情報を漏らした奴がいる。見つけ次第処理しろ。それと情報が漏れたルートも搜索しておけ」

『イエス・ユア・ハイネス。わかりしだい報告します』

ルルーシユは裏切り者の処分を情報部に任せ、本国の命令書を開封し、それを見て目を見開いた。そして、命令者を封筒に戻すと艦をEUに向けるように指示した。

「予定より早く事態が動きましたね」

「ああ。だが、問題ない。幸い、本国がユーロ・ブリタニア軍は全て私の指揮下に入るように命令を下した。戦力は充分だし、宇宙にも軍を待機させてある。ユーロピアの制圧等容易いだろう」

万能戦艦リンドブルムは、現在ジブラルタル海峡を抜け地中海からトルコに入り、ユーロ・ブリタニア本拠地があるサンクトペテルブルクに向かっていた。

ルルーシユが本国から受けた命令。国連軍が組織され、地球連邦の設立が事務レベルで決定したので、その前に脆弱なユーロピアを、ユーロ・ブリタニア軍を指揮して制圧せよということが書かれていた。この作戦はAEUも参加する予定で、勝利した暁にはブリタニア・ユニオンとAEUがユーロピアを半分ずつ支配することが確約されている。だから、AEUからはOZが反対方向から攻め入って二方面から挟み撃ちにして一気に制圧することになっている。

「OZはフランス、スペイン方面から攻め入り、ブリタニア・ユニオンはロシア方面から攻める手筈ですか……防御が固い方面を押し付たようですね」

「仕方がないさ。AEUはE,Uに同情的だったからな。それが急にブリタニア・ユニオンと同じ行動をするのだ。分け前を平等にするには多少敵が強い方面から攻めないと、ブリタニア・ユニオンが納得しないだろう」

ルルーシユは被害が大きくなる方面を攻めることによって、同じだけの分け前を得たのだろうと推測した。これでユーロピアは完全にAEUに見捨てられたわけだが、中身が俺なので、ユーロピアの日本人だけゲットーに押し込めて、財産を没収した政策をした時点で同情をする気にはなれなかった。

それどころか、これを逆に利用してユーロピア統治に利用しようと考えていた。父であるシャルルが見事に制圧できたら、そこを統治する総督に任命してやろうと言ってきたからだ。

（これで政治力をつけることができるし、これを理由に参加を断れる。一石二鳥だ）

ルルーシユはここで密かに自分だけの部下を増やして、力をつける計画を考えていた。

「ルルーシユ殿下。元ナイトオブツールである、マンフレディ卿が要望していた、KMFですが最終調整が終わったようですから、一緒に持ってきたようですね」

「まあな。ロイド、セシル。お前等から見てもあのKMFはどう見る？」

「それは興味ありますよ……！ 一回分解してみたいぐらいです」

「ロイドさん！ 私も大変いい物だと思いますが、ルルーシユ殿下はあまり、あのKMFを評価してないように見えますが？」

ルルーシユがこの地に赴くとき、マンフレディ卿の開発メンバー補給部隊に付いてきて、これの引き渡しをしてほしいと言ってきたの

だ。ルルーシユはついであつたので条件付きで了承し、ロイドとセシルに調べさせたのだ。

「私がガイアの物真似を見て喜ぶとでも？ それに時代はMSだ」

「確かにそうですが……。でも、KMFもまだまだいけると思いませんよ？」

「治安維持には役に立つだろうから、その分野で将来は活躍してもらうことになるだろうな」

治安維持にはMSは少々過剰戦力だ。火力も大きいので周りの被害が大きくなる。しかし、KMFならMS程の火力を持たせる必要はなく、サイズも小さいので街中で運用するに何かと都合がいいと考えていた。

MSはKMFの軍事的優勢を喪失させている。携帯できる火器がMSの方が火力で優れているので、その攻撃を受ければKMFの防御力は紙装甲同然だった。おまけにMSが携帯できるビーム兵器の登場。実験をしたときビームが命中しなくても掠めただけでKMFの装甲は破壊されてしまった。それとMSとKMFではサイズが違いすぎるので、MSの単純な蹴りやパンチ等でKMFは破壊されてしまい、白兵戦になったらほぼ敵わないという結果も出た。最もKMFはMSからすれば的が小さいので、そのようなことをするが難しいのだが。

最も生産・開発を中止するかどうかは今の所考えていない。どんな物でも使い道を考えてやればいいだけだ。その為の準備も密かに進めている。

「向こうについたら即座に制圧作戦を開始する。お前達も整備は怠るなよ」

「ランスロットの活躍の場を用意してくださいね」

「出番があればな。戦力の大半は向こう持ちな上、新型の加勢は不用と言ひ張るかもしれん」

ルルーシユ達は三日後、サンクトペテルブルクに到着し、現地の最高指導者であるヴェランズ大公と会見。本国の指令書を渡すと、彼は露骨に顔を歪めたが、命令には逆らえないので自分の指揮に入ること

に同意した。

「作戦準備はすでに完了している。あとは作戦を実行するだけだ」

こうしてユーロピア共和国連合を倒す為、国連軍結成の戦術・連携の練習を兼ねた作戦、オペレーション・イエロヴエリルが開始されたようとしていた。



## 第十三話 ユーロピア攻略作戦始動

ルルーシュが現地に入り、作戦の細かい詰め調整を行いながら、発動させるタイミングを見計らっていた頃、すでに三大国家が同盟を結び、国連軍が結成されることは確約となっていた。無論この影にはアレハンドロ・コーナーとリボンズ・アルマークがいた。

彼らはトリニテイの投入を早めて、三大国家が手を結ぶように仕向けた。それと平行して、ヴェーダの掌握を行い、情報収集の結果、現在ジンクスがルルーシュの手にあることがわかった。当初は奪還を試みようとしたが、すでに特許申請を完了している以上、手を出すことができなかった。だが、幸いルルーシュの方からジンクスの提供があったので、渡り船とばかりに彼らは関係者を動かし、国連軍結成にこぎ着けることに成功したのだ。そして、国連軍による前哨戦でもある、このオペレーション・イエロヴェリルが考案された。この作戦と平行して、アレハンドロはZEXISを掌握するべく、自ら宇宙に向かった。

ルルーシュはそのことをエルガン代表から入ってきた情報で知ったとき、自分もZEXISと同じく、アレハンドロの影響力を排除するための派手な囷にされたことを知り、眉を潜めたと同時に、これがエルガン代表からの依頼だと悟った。

（しかし、エルガン代表もユーロピアを見捨てるとはな……。国連の分担金を素直に払っている日本がユーロピアにいい感情を抱いていないから、その方面で圧力があつたのかもしれないな）

ルルーシュはただでさえ国際的に孤立しているユーロピアを哀れみを感じた。自分がこの作戦を実行し、国連がそれを黙認したのなら国際組織にすら見捨てられたことになる。恐らく地球連邦での地位は二等国扱いになるはずだ。最もある意味自業自得なので、同情すれども余程の条件を出してこない限りは助けてやるつもりはないが。

（作戦開始はイスタンブールに到着して、三日後か……）

ルルーシュがイスタンブールに到着して、三日後。遂に作戦が開始

のときがきた。

「勇敢なる兵士諸君！ 只今より、オペレーション・イエロヴェリルを発動をここに宣言する！」

ルルーシユは通信越しに戦闘開始を待っている軍人達に、オペレーション・イエロヴェリルを言い放った。通信士が作戦発動を各部署に通達し、慌ただしくなる。

唯一の懸念材料であるZEXISだが、彼らはインペリウム相手に派手に立ち回っているらしいから、両者に邪魔されることはない。最もこのタイミングで発動させるつもりだった。エルガンから、すでにアレハンドロ派を処理すべく行動を起こしていることを伝えられている。この作戦はアレハンドロが自分の思い通りになっていると、錯覚させるための心理作戦の側面もあった。

(作戦発動直後にOZが大西洋側から攻撃を開始。我が軍はロシア方面からナルヴァからリガ方面へ、スロニムからワルシャワへ進軍し、ワルシャワで合流。イスタンブール方面からバルカン半島を制圧しつつ、イタリア方面へ進軍か……まさに物量作戦様様だな)

三大国家が手を結ぶことによつて各地の余剰戦力の一部を割くことができたから補給の心配はない上、各地の占領するための兵や人員も用意できている。最悪現地の役人をそのまま雇ってしまえばいいだけだ。

「ロシア方面軍、聖ミカエル騎士団総帥ミケーレ・マンフレディ卿、聖ラファエル騎士団総帥アンドレア・ファルネーゼ卿から連絡。我、敵部隊を撃破。作戦行動に問題なしとのことです」

ルルーシユが色々と考え事していると、各方面から戦況報告が入り、艦内オペレーターのエリス・クリシエシスカヤがルルーシユに報告する。

「そうか。では、我々も予定通りに行うとしよう。リンドブルム発進させよ」

「イエス・ユア・ハイネス」

リンドブルムが宙に浮き、イスタンブールから出発した軍に合流すべく移動を開始した。

一方ユーロピア軍総司令部は大混乱に陥っていた。三大国家の内の二大国家が自分達を挟み撃ちにして攻めてきたのだ。すでにフランスのブルターニュ半島に上陸されたあげく後退を重ねていて、援軍を要請している。

ロシア方面からブリタニア・ユニオン軍の、聖ミカエル騎士団と聖ラファエル騎士団が攻めてきており、バルカン半島方面から今回の総指揮官のルルーシユ・ヴィ・ブリタニア本人がMS部隊を率いて攻め込んできたと報告も入った。

『本部、すぐに増援か撤退指示をお願いします。このままでは支えきれません！』

「何とか持たせろ！」

『AEU軍は要塞に攻撃を加えています！今は持っていますがこのままでは回り込まれて包囲されてしまいます！』

「何のための要塞だ！ AEU軍をそこに釘付けにするんだ！ パリを土足で踏みにじられていいのか！」

「もうすぐ、フランス方面は援軍が来る！ 何としてでも食い止める！」

現場からの援軍要請や、どうすればいいか本部に意見を求める通信がひっきりなしに入り、通信士は大忙しだった。

総司令部にいる將軍達は、それぞれの通信に応えつつ、自軍の状況に地図を見ながら唸っていた。

「まさか、AEUまで加わって来るとは……」

「どうやら、政治家連中は何も答えなかったがああのは本当のようですな」

「国連軍が結成ですか……」

何週間か前に国連軍が結成されるという、噂が流れた。最初はデマだろうと政治家連中が語っていたが、AEUがブリタニア・ユニオン軍と、共同で攻めてきている状況を見ると、デマではなかったらしい。「それよりも、この事態を乗り越えねばならん。各戦線の状況は？」

「通信を聞けば想像できるかと思いますがどこも持ち堪えるだけでやっつとです。フランス方面は幸い要塞線を築いていましたから、何とか食い止めています。しかし、東部方面は徐々に戦線が後退してきており、バルカン方面は先程入ってきた情報によりますと、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが自ら部隊を連れて出撃し、我が軍を一蹴。バルカン半島にいた我が軍を完全に制圧し、破竹の勢いでイタリアに侵入しました」

「何だと!?! 軍は何をやっていたのだ!?! たかが一機に軍が蹴散らされたあげく、容易くイタリアに侵入されるとは!?!」

將軍の一人があまりにも自軍の不甲斐なさに怒鳴る。その怒声を間近で聞いた参謀は、内心で煩いと思ったが、味方同士で罵り合っている場合ではないので、それを表に出さずに参謀としての仕事を果たすことにした。

「まずは、突出している敵大将であるルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを撃退するのが優先すべきかと。西部戦線は持ち堪えられていますから、当面は問題ないでしょうし、東部戦線はユーロ・ブリタニア軍が攻めてきていますが、特殊部隊を持って進軍を遅らせつつ、戦線が崩壊しないように反撃の機会を窺っていますから、時間を稼げるでしょう」

「ほう。つまり、各戦線を維持しつつ、敵大将の首を取るといわけか」

参謀の一人が出した作戦は、東部戦線と西部戦線に送る援軍の一部を送り、突出している南部戦線の敵総大将部隊を撃滅、或いは敗退させたあと、その戦力を近場の東部戦線に移動させ、相手の背後に回って退路断ち、殲滅するというものだった。そして、最後に西部戦線に戦力を投入するというものだった。

この作戦案に劣勢で気落ちしていた、一部の将校が色気を出した。現状では、それしかないと思ったからである。だが、幾人かは難色を示した。切れ者で有名なルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが都合よくこちらの作戦に嵌まるとは思えなかったのだ。何よりこちらの希望的観測が入った作戦は机上の空論ではないかと。

その作戦を取るか否か散々揉めたが、三日後にその作戦を採用する運びになった。しかし、この遅すぎる決定と、その準備期間が彼らの命取りになるとは誰もまだ気づかなかつた。

## 第十四話 ユーロピアン戦争終結

イタリア北部の海岸。現在ここではユーロピア軍とブリタニア・ユニオン軍が激突していた。

イスタンブールから進軍した、ブリタニア・ユニオン軍は圧倒的な物量とルルーシュの指揮で、一週間足らずでバルカン半島に駐在する軍を蹴散らし、その三日後にはそのまま北イタリアに陸と海の二方向から侵入を開始した。

ユーロピア軍もさすがにこの辺になるとかなり抵抗し、ブリタニア・ユニオン軍も思うように進めず、両者は一進一退の激戦を繰り広げていた。

「隊長！ 敵の勢いがあります！ このままでは支えきれません！」

「何としても死守しろ！ ここを抜けられると後がないぞー！」

AEUヘリオンの中で空戦をしながら、自分の部隊を指揮する隊長は、情けない悲鳴を出している部下を叱咤した。

AEUヘリオンがなぜユーロピアで使われているのかというと、KMfだけではMSとKMfの混成軍であるブリタニア・ユニオン軍に敵わないと判断した、ユーロピアがAEUから購入したからだ。ちなみに地上ではリーオで構成された部隊もあり、両方ともAEU軍と勘違いされないように、塗装を施し色違いにしていた。ちなみにAEUは軍需関係者はこの戦が起こる前に、EUへ売ることでも在庫処理ができたので、かなりの利益を上げていたた。

「何としても援軍が来るまで食い止めるのだ！」

MS隊を指揮する隊長機は部下を鼓舞すべく、敵のKMfサザランドとグロースターに対して、リニアライフルを連続で撃ちこみ破壊する。その戦果に部下や周りは勇気づけられて、果敢にブリタニア・ユニオン機に攻撃を仕掛けていった。

パイロットの一人が勝てると思ったそのとき、突然友軍機が爆散した。そして、次々と味方機が何者かの攻撃を受けて破壊されていく。そして、

『ぐわアアア!!』

「た、隊長!? 何が起こったんだ!」

自分の隊の隊長機が撃墜されて、動揺したパイロットが状況を把握しようとしたが、それは必要のない行動だった。なぜなら、原因が自機の目の前に迫ってきていたからだ。

「あ、あれは……ブリタニア・ユニオンのガンダムだと!」

その機体はルルーシュが搭乗している、黒と金の二色カラーが特徴のアヴェインイーゼスだった。ルルーシュは機体を最大スピードまで出して、敵機体に肉薄。凄まじい速度で敵機を撃墜して活路を開いていた。

(こんな戦さつさと終わらせるに限る……。いくら戦後処理を任される立場にあるとはいえ、本国と俺が受ける恨みのが圧倒的に多い……。まったく割にあわなすぎる……)

ルルーシュは今回の戦争が地球連邦を敵機の反撃を躲して、敵隊長機を素早く撃破して連携を乱し、残ったAEUヘリオン、リーオー等の敵軍機を次々とビームライフルを撃ちこんで一機ずつ破壊していった。敵が連隊を組んで向かってきたときには、カドリユウス改複層ビーム砲の砲撃でまとめて蒸発させて、敵を殲滅していく。中距離離では歯が立たないと思ったのか、敵機のAEUヘリオン何機かがソニックブレイドを引き抜き、近距離戦を挑んできたが、それを横に移動すること躲して、敵機が空振りをした隙にビームライフル敵機に向けて、ビームを発射して破壊して、もう一機の攻撃を上に乗って回避し、ビームサーベルを上から敵機に突き刺して爆散させた。

「左翼の部隊はそのまま敵を半包围をして敵機の逃げ道を少なくしろ! 右翼はそのまま現状維持で敵を取り逃がすな! 残りは私に続け!」

ルルーシュは敵機を撃墜しながら、自軍を指揮して的確に敵の弱い所をついていった。そして、一部の敵部隊が半ば瓦解して後退していくのを、確認

「ルルーシュ殿下が活路を開いたぞ!」

「さすがルルーシュ殿下! あの方はお母上の血は確実に受け継が

れておられる！」

「ルルーシユ殿下に続け！」

「オールハイル・ルルーシユ！」

ルルーシユの鬼神の如き強さを見せられ、怯んでいた兵士たちは勢いを盛り返し、敵に対して苛烈に攻撃を加えていき、ルルーシユが敵軍を突破してつけた傷をさらに広げていった。

ルルーシユが先頭に立って軍を指揮した結果、士気は大いに上がり、三日後北イタリアを突破。遂にEUの首都があるフランスに侵入した。そして、数日後ブリタニア・ユニオン軍はパリを制圧。EU（ユーロピア共和国連合）は残存軍をまとめてブリテン半島へと逃走した。

パリからEU軍が敗走した一週間後。

ルルーシユは戦後処理をすべく、パリのベルサイユ宮殿に入り、そこを仮の政庁と定めて、その一室で書類と格闘しながら、統治政策を進めていた。

「まずは、ゲットーの解放だ。そして、EU政府によって不当に財産を没収された者達へはそれを返却する」

なぜ、エリア住人の財産を返却することに、疑問を感じる者がたくさんいたし、周りにはものすごく反対した。なぜ、ナンバーズの為にそのような労力を割く必要があるのかと。

ルルーシユは反対する者を一人、一人説得した。

まずはそうしないと暴動が発生するし、ユニオンの方ではない日本人もいるのでそれを調べる必要があるからだと説明した。さらにゲットーにいる者に財産を返させて、政府の息がかかっている財団や企業に無駄に金を使わせて疲弊させるためだ。そして、市場を奪い資金がなくなった困窮した企業を安く買ったとき、己の財団吸収し、傘下に収めるためだ。

「モニカ。宇宙の方はどうなっている？」

「ルルーシユ殿下の仰られた通りになりました。先日ZEXISとジnkクス部隊を中心とした国連軍が激突。激戦になり、投入したジnk



クスはほぼ全滅、三大勢力を中心とした国連軍は敗北しました。国連本部の方はアレハンドロ一派の掃討に成功したそうです」

宇宙の方では原作通りに事が進み、ZEXISは国連軍と激突した。

ルルーシユにも参戦要請があつたが、こつちが忙しいから無理だと断つた。その変わりに、次世代GNドライブ搭載機MS、アクラブ（正式名はアクラブウィンダム）試作型を3機、データ収集を兼ねて財団から送り込んだ。最もモニカが報告した通り、参加した機体はほとんど全滅。無事な機体はなく、アクラブも2機が破壊され、1機が大破したという散々な結果だった。

（さすが、原作主人公機部隊だな……。あれだけの精鋭ばかり集めた大部隊を粉砕するとは……）

ZEXISと万が一、敵対してしまった場合どうすれば勝てるか考えが思い浮かばなかった。真正面から戦わないのならいくらでも手が打てる。奇襲を繰り返したり、補給を断って、干からびさせてしまえば、近代戦は戦えない。

（それに地球連邦の財務長官就任が決定しているからな。地球連邦の予算は俺が配分を決められる）

ルルーシユは地球連邦の財務長官に就任することになっているので、地球連邦の財布を握れることになっていた。これはジンクスを無償提供したことと、GNドライブ特許を押さえたことが大きかった。

「終わったことを気にしても意味はない。ところでこれからマルカル家と面談だっけ？」

「はい。巨大コンツェルン主のマルカル家です。最も今は元が最初に付きますが」

巨大コンツェルン主のマルカル家は、パリ制圧のときに僅差で逃げ遅れ、一族全員が捕えられた。EUの市場を狙っていたルルーシユは、この戦争でほぼ壊滅した土地や工場、会社等を遠慮なく回収・吸収した。その結果、マルカル家が主の巨大コンツェルンは解体、消滅した。最も買い取った残った物も価値が著しく低下していたので、いずれ自然消滅していた可能性が高いが、結果マルカル家は財のほとん

どを失った。おまけにユーロ・ブリタニアの貴族が、戦利品としてEU各国の土地を「自分の土地だ」と言つて分割し、所有宣言を行つているので不動産関係は軒並み潰れていただろう。

「一体何の用だ？」

「はあ。何でも寄付したいものがあるとか」

「そんなものあいづらに残つていたのか？ まあ、約束をした以上は会わねばならんからな」

ルルーシユは何となく嫌な予感がしたが、取り敢えずマルカル家に向かった。

「私も忙しい身だ。用件を聞こう」

「わかりました。ルルーシユ殿下。此度は我がマルカル家をお引き立てくださるようお願いしにきました。それが無理なら、今回の戦争で失った財産のいくつかに掛けていた保険金を支払ってください」

ルルーシユは表面上では考え込むようなしぐさをしたが、内心では呆れていた。EU系の資本等はほぼ、ブリタニア・ユニオンとAEUの財団等の流れてしまい、土地に関してもブリタニア貴族がこぞつて分割している。おまけに復興の為に予算が必要なのに、マルカル家に金をやる余裕はないからだ。

「いえいえ。そうしてくれば、私たちはルルーシユ殿下に忠誠を誓います」

「信用できんし、信頼もできん」

「無論言葉だけでは無理だとわかっています。ですから、我が娘をあなた様にお側に任せさせます。無論扱い方はそちらに一任します。

……レイラ、入りなさい」

「何？」

「失礼します」というきれいな声がドアの方から聞こえたので、そつちを見るとそこには、亡国のアキトに登場する、美少女指揮官、レイラ・マルカルがいた。

## 第十五話 交渉

ルルーシユはマルカル家当主から、彼女の養娘、レイラ・マルカルという少女の紹介を受けていた。

ルルーシユは無論この少女を知っている。なにせ同じ作品に登場する人物なのだから。

両親が元ブリタニア貴族でEUに亡命したあと、生まれた少女。そして、原作ではゼロ（ルルーシユ）の戦訓からKMF部隊の運用方法を考え実行に移して、EUの特殊部隊の指揮官でもあった。最も最初に軍上層部の横槍で最新鋭のKMFを無駄に消耗させられたのは哀れだったが。

「……当主。あなたは自分の娘を私に紹介してどうするのですか？ まさか、その為だけに呼んだのではありませんよね？」

ルルーシユは戦後処理を任されて総督に任命されているが、この就任期間は決して長くはないと考えていた。

ユーロ・ブリタニアは、自分達が尊い血を流して頑張ってきたのに、本国に名誉と手柄を横取りされて、内心では面白く思っていないことは丸わかりだし、本国は占領したユーロピアの利権をユーロ・ブリタニアと水面下で奪い合っている最中なのだ。目の前のマルカル家当主も多くの利権をその過程で失った結果（ルルーシユはこの過程でいくつかの企業等を買収した）、それを取り戻そうと目の前の当主は躍起になって、臨時総督である自分に縋ってきたのだと容易に想像がついた。

このような事態が占領してから頻繁に起きているため、地元支持者が増えてルルーシユの勢力が増大することを恐れた、本国の一部の者が自分を長く総督に就くことを、許すことはないだろうと思っていた。

「い、いいえ?! 違います!」

「……では、彼女をまさかとは思いますが愛人として差し出しますとか言わないでしょうね? 今更あなたの身内に価値があるとは、誰も思いませんよ? 彼女をただ見せたかっただけというなら、もう目

的を果たしていますから、帰えらせていただきます。私も生憎と暇ではありません」

ルルーシユは露骨に不機嫌になったといおう表情を見せつけて、話を切り上げることにした。原作の人物に会えたことと、所在が判明したことはある意味収穫だったが、その程度調べればわかることである。彼女との顔会わせの為だけにここまで赴いたわけではないので、内心少し後悔したのであった。

「ち、違います!! 正直に言いますから、待ってください! 実は娘をあなたの部下にと推薦したいのです。幸い、軍事に明るく才能もありますし、KMFも操縦できます。殿下の役に立つはずですよ!」

「……私を若造とバカにするのもいい加減にしてもらえますか?」

そのようなこと今の情勢では難しいということはおわかってはいるはずです。あなたはそんなに私を苛立たせたいのですか? これ以上は話すことはなさそうですね。残った利権を筆取り取られないように、ユーロ・ブリタニアの貴族達に気を付けてください。あなた方の僅かに残っている財産を接收しようと狙っていますから。それでは、私はこれで失礼し「お待ちください!」

ルルーシユは、彼が精々ユーロ・ブリタニアと仲良くならないように、最後に置き土産を残したあと、帰ろうとしたそのとき、レイラ・マルカルが突然大声を発して引き留めた。

「ルルーシユ殿下。私をどうか部下へと引き立ててください。これでもKMFの操縦もできますし、指揮官経験もあります」

「私は獅子身中の虫を飼う趣味はない。君が裏切る可能性と天秤に賭けたら、軍へと推薦する気すら起こらないのだが? それに君の身の安全を考えるなら、このまま何もなかったことにして、目立たず静かに暮らした方がいいだろう。そうするのなら私も手を回してやらんでもない」

ルルーシユはレイラ主張を即座に却下した。

彼女がブリタニアからの亡命貴族の子供だとわかれば、まずいい扱いをされない。何せ祖国と戦った裏切り者だ。その上見た目麗しい年頃の女性であれば、何をされるかは容易に想像できる。このまま、

隠れて静かに暮らすのが彼女も幸せだと思ったから、敢えてきつく言い放った。

「……仰る通りです。だから、己の身を守る為にあなたの側で仕えたいのです。力を持たねば私は生き残れない状況になってしまったからです」

レイラはルルーシユの言葉を受け入れつつも、理性的に反論した。そして、ルルーシユに懇願するような視線を向けた。

ルルーシユはレイラをどうすべきか迷った。彼女の言う通り力がなければ、ブリタニアの支配下では生き残れないことは事実だ。そして、彼女の未来はあまり明るくない。

己の中の優しき（甘きともいえる）と、味方になる可能性が低い原作キャラに、利益を与えるのをよしとしない部分で葛藤してしまっただ。そして、彼女がブリタニアに帰属して、自分を本当に支えてくるのか若干不安もあったが、原作キャラに好き勝手振舞われて、イレギュラーなことが起こることは避けたい。

「……それなら、私の軍に入れるように手配しよう。幸い、ブリタニアは実力主義だ。手柄をある程度立てれば問題ないだろう。一週間に身辺を整理しておけ」

「……」事情はわかっていきます。私のご要望を聞いていただきありがとうございます。ルルーシユ殿下」

「それよりも、今日から、君は私の部下だ。それを忘れるな。私は先程も言ったが裏切りを嫌う。亡命貴族の件は君が生まれる前だから、それに関しては私は裏切るとは思っていないし、罪だとも思ってもいい」

「っ！ あ、ありがとうございます」

レイラは笑顔を浮かべ、ルルーシユに礼を言い頭を下げた。

「モニカ。お前専用のKMF開発許可が通った。今回接收したクレマン社のKMFとランスロットをベースに開発するそうだな」

「はい。皇帝陛下に許可を頂くのは大変だったと思いますが、よく

許可が下りましたね？」

「今回の戦闘における報酬として通しただけだ」

「ルルーシュ殿下……。ありがとうございます」

モニカはルルーシュに頭を下げた。

「気にするな。私と君の関係だ。これぐらいは当然だ」

「はい。これからも誠心誠意お仕えさせていただきます。しかし……」

「どうした。先程のレイラ・マルカルの件か？」

「はい。あの者が裏切らない保障はありません。なぜ、近くに置く等考えたのですか？」

モニカはルルーシュに先程のレイラを取り立てることに疑問を呈した。

彼女から言わせれば、レイラ・マルカルが裏切る可能性は高い。なぜなら、自分達は彼女の国を滅ぼしたのだ。いい感情を抱いていかなのは人として当然だからだ。

「彼女は色々条件を出してきた。それさえ守ってくれるなら、多少適当な扱いをされても構わないらしい」

「条件？」

「どれも問題ないものばかりだ。最たるものは彼女の親しい者に生きる糧を与えることだ。それは技術者接収という形で済ませる予定だ。他の条件も俺の手で届く範囲だった。さすが才女だというべきか、一皇子の権限などたかが知れていることは、向こうもわかってくれていたようだ」

「そうですか……」

モニカは微妙に納得できない顔をしていたが、主君の決定にこれ以上意見を挟むことは不敬になるので引き下がった。

「それよりも引き継ぎを済ます為に明日から、また書類仕事だ。覚悟しておけ」

「イエス・ユア・ハイネス」

ルルーシュとモニカは総督本部に帰還し、政務に戻った。そして、一ヶ月後。ユーロ・ブリタニア総帥と会談。ユーロピアの治安がある

程度改善されたので、運営権を譲渡してルルーシュ達は本国へ帰還した。

## 第十六話 異世界進出計画？

本国へ帰還したルルーシユは本社に戻り、その後、宇宙に上がり、自らが建設と管理、経営をしている月面都市へ入り、予てから計画していた超極秘計画を発動する為に準備に取り掛かった。

「いよいよだな」

月面都市にある会社の敷地内で一年前から、密かに進めている計画を実行できる余裕ができたとあって、思わず顔がにやけてしまう。

(まさか、エルガンも俺が異世界に進出しているなんて思ってもいいまい)

俺の次元力を操る力はスフィアリアクターに例えれば、すでにスフィア・アクト並みの事象制御段階に達している。これで本物のスフィアを奪えれば文句なしなのだが、アサキムに狙われるのは嫌なので、諦めることにした。

だから、いよいよ実行可能になり、それ専用の転移装置も完成させて、すでに拠点造りは完了して、国家建国をできる段階に入った。

この計画の目的は勿論、自分を頂点とした国を作って権力と力を確保することだ。ブリタニア帝国皇帝の地位についても、デメリツトの方が上回るし、原作通りに進むならZEXISと戦争やって、武力は勿論、権威も失墜して衰退していくからだ。

そもそも、ルルーシユはブリタニアが民主主義の国とあれほどうまく統合できたなんて疑問に思っていたのだ。

俺はこれは何か裏があるのでは推測して、力を使ってまで捜査した結果、我が父シャルルが、ユニオンを裏で支配する財界連中の幾人にギアスを使っていたことが判明した。この事実を知って、ギアスの力は凄まじいと思った。しかし、ギアス関連のことを公表するつもりなどない。どの道、再世戦争でブリタニアは終焉を迎えるから、ギアス関連は秘匿しておいた方が、混乱もなくていいのではと判断した。何より公表等したら、ブリタニア・ユニオンは負の遺産を背負い込むだけだからな。



地球連邦結成で我が兄上シュナイゼルは地球連邦会議の議長に就任したが、俺は財務長官に就任する予定だ。しかし、再世戦争終盤までは裏でイノベイトが何かも指示するので、裁量権等があるかどうか正直怪しいかった。地球連邦軍の結成の時に兵器と資金を支援して、エルガン代表の要請でZEXISにも支援を行ったにもかかわらず、あまり旨みの無い、何とも微妙な立場だ。

唯一の慰めはGNドライブと核融合炉の特許を独占しているおかげで、兵器産業で引き続き利益を得られることだが、自らも戦場に出て、囀の役目を引き受けたのにこの中途半端な扱い……。割に遭わなすぎる。

(所詮頼りになるのは自分の力と自分が信頼する者だけということか……)

その上、連邦軍再編に伴ってマユとステラを正規軍に回せと、本国から命令が来たのだ。つまり、俺が個人的に動かせるパイロットを引き抜かれてしまったのだ。まさに踏んだり蹴つたりの状況だった。

(その為にも己が国を作るのだ。俺の継承位は高くないからな。例え、何かの運命が狂って父であるシャルルが認めても、周りは許さないだろうからな)

特にオデッセウス派とシュナイゼル派の貴族達は絶対に認めないだろう。もし、帝位にでも着いたら内戦になるのは確実だ。だから、どのように転んでも、自分が帝位を継ぐなど面倒事ではないのだ。

ルルーシユは計画が順調に進んでいることを確認したあと、秘密基地から都市にある支社の自室へと戻っていった。

「モニカ。この宙域にテロリストが破壊活動をするという情報を掴んだと、連邦に伝えてくれ。頼んだぞ」

『わかりました』

ルルーシユはアロウズ結成を阻止する為に、例の事件を防ぐことを考えていた。

彼の組織が行う、最大の暴挙である軌道エレベーター破壊を阻止するためだ。最も修正力で失敗する可能性が高いかもしれない。

（軌道エレベーターを破壊したら、どれだけ損害が出るのかわかっているのかイノベイトの奴ら……）

自分達の金じゃないからどうでもいいのか、それとも人間の命等何とも思っていないのか。

ルルーシユは恐らく両方だと思った。あの事件の被害総額についてくだったんだ？ 少なくとも軌道エレベーターの修理と遺族への補償と賠償金だけでも、天文学的な金がかかったはずだ。

その為にもアロウズ結成は防ぎたい所だが、歴史の修正力で無意味なるかもしれない。その為にも色々と備えておく必要があった。

「例の最近素性の知れない男の情報は入ったか？」

『はい。調査に時間が掛かりましたが、漸く判明しました。名前はアツシユ・グレイと名乗っていて、どうやら、MSパイロットをしているようです。宮中の貴族に接触していたのは自分専用のワンオフ機を欲していたが故の行動だったそうです。その為の資金を提供するように交渉をしていたようです』

「（ザフトの特殊部隊に所属していた敵と同じ名前だと？）交渉か……取引の間違いではないのか？」

『その通りです。彼は特殊工作員としては優秀らしく、支援要求をした宮廷貴族の個人的な依頼を遂行していたようです。それで得た資金とどこからか援助をもらったらしく、それを元手にわが社にMSを注文してきました』

そのオーダーメイド機的设计図をみた瞬間、即座に自分が使っていた機体を要求したことがわかった。

リネジェレイトガンダム。おまけに疑似GNドライブ搭載型ではなく、主流ではない核エンジン搭載型をチョイスしてきたのだ。この男の正体はアストレイで登場したアツシユ・グレイ本人か、原作を知っている転生者。或いは、ただの偶然のいずれかだと推測した

どれだけ、荒稼ぎしたのか想像もつかないが、援助もしてもらったのだろう。恐らくリボンズあたりだと、容易に想像がついた。

「注文を受けた以上は引き受けなければならぬ。例の機体の予備パーツがあつただらう。それを使えば早くロールアウトできるはずだ」

『よろしいのですか？ あの機体の予備パーツを……。まさか、データを取る為ですか？』

「そうだ。そして、機体にはこちらで遠隔操作可能な自爆装置をつけておく。これで敵に回っても素早く処理できる」

『ルルーシユ様が仰るのなら私は特に何も言いませんが……』

「頼むぞ。それとレイラ・マルカルはどうしている？」

『現在、ルルーシユ様に対する忠誠を確かなものにする為に教育と訓練を施しています』

「そうか。頼んだぞ」

『イエス・ユア・ハインス』

ルルーシユはモニカとの通信を切り、次に地球連邦軍に配備するMSについての資料を読みながら、一年間をどう過ごすか戦略を練るのであった。

「とりあえず、ユーファミアと食事の約束が迫っているからそれを果たすとするか……そうでもしないと姉上がまた文句を言ってくるしな……」

ルルーシユはまず身内との約束を果たすことにした。ユーファミアがしつこくお願いしてくるので、私的な時間が少ないにも関わらず領いてしまったのだ。ユーファミアの喜びようは相当だったらしく、毎日カレンダーを見てその日を待っているらしい。周囲の者も暖かい目でその様子を見ているそうだ。

ユーファミアがルルーシユに向ける好意は単純に兄妹の好きではなく、異性のそれではないかと宮廷で囁く者が少数ながらいるのは事実。その為、社員や一部の貴族の中には「遂にユーファミア様がルルーシユ様に結婚を申し込む」や、「いや、ルルーシユ様が申し込むのでは？」と言う者がいる程だ。

（確かにユファイは綺麗だし、性格も悪くないからな。これが貴族の子女なら婚約が成立したらあつさりと引き受けたかもしれない。だ

が、俺とユフイは腹違いの兄妹だ。でも、近親婚は禁止されていなかったような……って何考えてるんだ俺は!?)

ルルーシユは一瞬よくない考えに至り、慌ててそれを振り払う。そもそも、ブリタニア皇族と婚姻などしたら、ブリタニア・ユニオンに縛られてしまう。父の負債など背負い込みたくないのだ。

「はあ……前途多難だな」

ルルーシユは、再び書類処理と今後の戦略を練る始めるのであった

「何で予算の増額を認められたのに、君は多くて、僕たちの方は金額が少ないのかな……」

「それは私の紅蓮の方が活躍したからだろう。それにランスロット量産計画が叶ったんだから、文句言うんじゃないよ」

「これなら、ランスロットをあっちに送っておくべきだったよ。そうすれば新たなランスロット改造計画の予算が下りたかもしれないのに」

「ロイドさん。デヴァイサー関係で無理だったんですから諦めてください」

プリン伯爵ことロイド伯爵は、ライバルであるラクターシヤの方が、研究資金が上なことに文句を垂れていた。その原因は紅蓮がZE X I Sに出向して、インペリアル相手に大活躍したことが大きかった。

そして、原作でのカレンと、紅蓮聖天八極式の性能を知っている、ルルーシユにとってはこの機体を早めに生産して、その量産型を作れないかと考えていたからだ。例え、量産は無理でも、MS等に技術を流用できれば最終的にプラスなるはずと。ちなみにエナジーウイング関連の予算は与えられており、セシルは自分の研究が認められたと内心大喜びしていた。

「KMFの予算はMSが主流になってきてからは、ただでさえ削られているんですから、文句を言わないでください。もし、不満が重役の耳に入ったら予算を削られますよ」

「やっぱり現実には厳しいね……。いつそのこと、今度ルルーシュ殿下に直訴しに行こうかな？」

「絶対にやめてくださいいね!？」

ロイドはセシルに迫力のある笑顔で言われて押し黙ったのであった。

このあと、研究を再開した三人だが、ロイドとラクターシャはいつも通りに、互いの研究について意見を言いあったのであった。

## 第十七話 エネルギーテロ発生

アロウズの結成の切っ掛けは、オービタルリングによる太陽光発電システムで起きたテロ事件だ。

ソレスタルビーイングが壊滅したあと、その支援組織のMSパイロットが、ヴェエーダを見つける為に起こしたはた迷惑な事件。

ルルーシユはアロウズ結成を阻むべく、個人的に繋がりのある将校に連絡を取り、警戒を厳重するように促した。その為ジンクスII20機とバイカル級戦艦三隻が派遣され警戒を行っている。

「打つべき手がこれぐらいしかないとはな……。正直不安だが、今は軍に任せるしかない」

ルルーシユは原作での敵パイロットの腕を見る限り、ジンクスが20機いても不安だった。

なぜなら、この前月にある地球連邦軍基地に、何者かが侵入して最新鋭の機体を奪っていったばかりだからだ。

（軍は何をやっているんだ！ よりによって疑似GNドライブ搭載機を奪われるとは！）

ガンダム疑似太陽炉搭載機タイプ計画。通称GNT計画（正式名称ガンダム太陽炉搭載タイプ開発計画）。

アクアヴィット社によって行われている新たなハイエンドMSを製作するプロジェクト。我が社によって今まで開発されてきたガンダムタイプに、疑似GNドライブを始めとした新技術を投入することで、ガンダムタイプを始めとしたMSをパワーアップさせたり、そこから得られたノウハウを使い、新機体を開発するMS開発計画だ。

この計画はすでに始動しており、試験機として当時パーツのまま保管されていた、Zガンダムを組み立てて、GNドライブを搭載できるように改造した物をロールアウトして、月基地で試験運用を行っていたのだ。

試験機といえど、Zガンダム基本性能はそのままに、いくつか武装を変更した機体だ。寧ろ、オリジナルZガンダムよりも性能的には上だ。ウエブライダー形態になれば飛べないZガンダムだが、今

回開発した試験機はMS形態でも大気圏内を飛ぶことが可能だ。無論これはGNドライブの恩恵が大きい、Zガンダムのウエブライダー形態時の、スピードにはさすがに敵わないが、アヘッドよりはMS形態での高速飛行を可能としている。

それがテロリストに奪われた。幸い疑似太陽炉に関してはブラックボックスにしてあるので、製造法が漏れることはない。それに下手に分解しようものなら自爆するようにプログラムしてあるので、技術漏えいに関しては全く問題ないが、簡単に機体を奪われた地球連邦軍の不幸に胃が痛くなる。

「会長。ジnkクスⅢの量産を開始しました。それと後継機であるアヘッドも試作機が完成しました。さっそく技術試験運用部隊に送るので許可をお願いします」

「わかっている」

ルルーシュは提出された書類にサインを記し判子を押して、書類を持ってきた部下に渡した。部下はそれを受け取ると、部屋から退出していった。

第二次スパロボZでは一年間しか空白期がないのに、新型の開発される速度は凄まじく、異常な開発スピードだとつくづく思ってしまった。ちなみに技術試験運用部隊は、俺の息がかかっている部隊なので、その気になれば独自に動かすことも可能だ。

「会長も健康と身の安全にはお気をつけてください。最近、反地球連邦組織が活動を強めていますし……」

「わかっている。特にコロニーと地球連邦に加盟できなかった国は治安が悪化してきているらしいからな。そのせいで正常な経済活動ができなくなっている」

コロニーはドーリアン外務次官の殺害を契機にOZが掌握。それに反発する勢力はコロニーのガンダムを使い、反OZを掲げて戦い続けている。地球圏では暗黒大陸が再び侵入不可となり、中東地域では地球連邦に加盟できなかったせいで、恐慌が発生しており経済が破綻しかけていた。そして、治安が悪化してテロが起こり、投資が滞って必要な公共事業や経済活動が麻痺して、治安がさらに悪化という負の

スパイラルに陥っていた。

アザティスタンの王女マリナ・イス・マイルルは祖国を救う為に、アザティスタンに経済支援を行ってくれるように、諸国を訪問していたが、いい返事はもらえず梨の礫だった。

ルルーシユの元にも、無論彼女は訪ねてきた。世界トップクラスの財力を誇り（インペリウムの活動によって大打撃を受けた企業等を買収するなどして）兼ブリタニア・ユニオンの皇子支援をお願いするのは当然といえた。しかし、ルルーシユは彼女の要望に対して、遠回しに断りを入れた。アザティスタンは治安が悪く、下手をすれば社員がテロや誘拐に合う可能性が高いので、治安が回復するまでは無理だと、マニュアル通りの答えを出して、彼女の要望を煙に撒いたのであった。

（それにしても、相変わらず綺麗で清廉なお方だったな……。しかし、会社の利益どころか、不利益になることはできない）

ルルーシユも年頃の男である。美しい女性や美少女等には興味はあった。しかし、身近にいる皇女は腹黒い連中ばかりなので、ストレスの一因になっていた。

だから、マリナ・イスマイルル王女の純粹で綺麗な心から滲み出る美しさと、悲痛な訴えに、思わず絆されそうになってしまったが、何とか自制心を發揮して、それを抑え込んだ。

「彼女の動向は逐次報告しろ。もしかしたら、支援を行う輩が現れるかもしれない」

「わかりました」

重役が退室するのを確認したあと、警戒を行っている宙域に派遣したマユ・アスカに、異常がないか確認する。

『今の所、異常はありません。連邦軍も油断なく警戒しております』

『そうか。何かあったら、こちらに連絡をいれろ。ただし、無茶はするなよ。いいな、マユ』

『はい、了解しました。ルルーシユ様も他の皇族にお気をつけてください』

ルルーシユは信頼できる部下である、マユに無茶をしないように命



じた。

彼女の役目は、今回の事件を見届けることであって、連邦軍の手助けをするために、派遣したわけではないのだ。

（少し根回しに苦労したけど、マユとステラに関してには連邦軍に入っても、俺が指示できるようなった。だから、密かにマユをこの宙域に派遣できた）

今回の根回し工作には苦労した。未だに成果のない研究の資金を得るべく、金を普請してくるシュナイゼルに、貸した金と引き換えに彼が持つ権力を利用した。それだけ、ルルーシュには信頼・信用できるパイロットは貴重だったのだ。

（まったく、スパロボ世界はゲームでやると面白いが、実際にその世界で暮らしてみると、悩み事がつきないな。はやく、この世界から脱出したい）

金と技術、人員を確保したら異世界に行くべきだと改めて思った。その為には転移装置を完成させる必要がある。

「どの世界に行くべきか……とりあえず、今ある技術で圧勝できる文明世界がベストだな……」

ルルーシュは、会社と連邦の書類を処理しながら、頭を悩ませながら、あれこれ将来のことを考えるのであった。

『こちら、異常なし』

『こっちもだ。本当にテロなんて起こるのか？』

ルルーシュが懸念していた、テロを防ぐために派遣された連邦軍の軍人は、宇宙船どころか、MS一機すら見当たらないので、提供されたテロ情報に疑問を抱いていた。

『もしかして、情報部の連中がガセネタを掴まされたんじゃないか？』

『ありえるな』

何も起こらないので、隊員の気も緩んできたのか、無駄話に華が咲く。

『あなた達、気を引き締めなさい!』

『申し訳ありません! リント隊長!』

今回の作戦を指揮するアーバ・リントが部下を叱責する。部下達は慌ててまじめに哨戒任務を再開した。

『今度無駄話をするのなら、罰を与えます。いいですね?』

『は、はい!』

リントは暢気な部下達に内心舌打ちしつつ、周囲を警戒するように命じた。

しばらくして、MS部隊からバイカル級航宙巡洋艦に緊急連絡が入った。

『大量のデブリが地球に衛星軌道に接近中です!? どうやら、作為的な物と思われるので、テロかと思われます!』

『何ですって!?! すぐに迎撃しなさい!』

すぐに迎撃を開始したが、デブリの数が多すぎて対応できないと判断して、リントは基地や近くにいる友軍に増援要請をした。

要請を受けて駆けつけてきた地球連邦軍は、このような事態に備えていたので、落ち着いて対処し始めた。飛来してくるデブリを破壊することに成功した。しかし、順調に思えたそのとき、迎撃を行っていたジnkクスIIの部隊がいきなり、ビーム攻撃を受けた。おまけにビームのいくつかはコクピットに直撃して、数機のジnkクスIIはGN粒子を撒き散らしてあっさり爆散した。

連邦軍は直ちに攻撃をしてくる敵機を搜索する。そして、敵機を捕捉したが、出現した機体に驚くことになった。

『あ、あの機体は!?!』

『そ、そんなばかな!?!』

『が、ガンダムだと!?!』

彼らの前に立ち塞がったのは、ガンダムタイプのMSだったので、連邦軍が驚くのも無理はなかった。

ガンダムタイプのMSは当初、ソレスタルビーイングの活動によるイメージ悪化から、製造計画を凍結すべきだという意見が出たこともあったが、

「ガンダムに罪はない」

と、上層部の軍人から多数叫ばれ、元々、ブリタニア・ユニオンのエース機として、開発されていたこともあって、情報操作と自軍のガンダムの活躍を積極的に持ち上げること、世論を納得させることに成功した。その結果、開発は進められることになった（それを聞いたルルーシュは会長室で大喜びしていた）。

『あ、あの機体、この前月基地から強奪された機体じゃないか!?!』

『強奪犯が今回のテロを仕掛けたのかよ!?!』

『知るか！ とにかく、迎撃しろ！ 幸い敵は一機！ 機体性能もデータ通りなら隔絶しているわけではない！ 包囲して撃破する!』

隊長の命令を受けて、慌てていた隊員はある程度落ち着きを取り戻し、ガンダムタイプのMS、Zガンダムに向かっていくのであった。

## 第十八話 蹂躪するZ

地球連邦軍は作戦の邪魔をしてくる、Zガンダムを仕留めるべく、現在宙域にいる三分の一のMS部隊を差し向けた。

『人様の機体を奪ってテロを手助けする極悪人め！ 覚悟しろ！』  
先陣をきつたのは元ブリタニア・ユニオン所属の連邦軍パイロットだった。

彼は自国が開発していた機体を強奪した挙句、それをテロに使用する輩に心底怒りを覚えており、真つ先にGNビームライフルを撃ちながら突撃した。他の機体も連携して逃げ道を塞ぐようにビームを発射する。

それに対してZガンダムはオレンジ色の粒子をスラスタから吹き出し、機体スピードを上げ回避行動に出た。そのスピードはジンクスIIでは追い切れるものではなく、あつというまに射程外に退避されてしまった。

『あの野郎逃げる気か!?!』

彼は逃げるZガンダムを追いかけて猛攻を仕掛けた。他の機体も慌てて後を追う。

だが、その時Zガンダムが急に方向転換を行い、オレンジ色の粒子の様な物を纏い凄まじいスピードで突撃してきた。

『特攻してくる気か!?!』

勇敢な連邦軍パイロットの操るジンクスIIは、突然敵が攻撃したことに一瞬驚いたが、自機に対して突撃攻撃をしてくる相手に駆けつけてきた友軍機と共にGNビームライフルを連射したり、GNバズーカの強力な砲撃を発射するが、ほとんどはGNフィールドに弾かれてしまい、GNフィールドを突破したビーム砲は、装甲にダメージを与えられることもできずに霧散してしまった。

『何て装甲だ！ Eカーボン製ではないのか!?!』

『もしかして、ガンダニウム合金製か?! 畜生落ちろよ!』

『は、早すぎる!?! 攻撃が当たらないぞ!?!』

彼らはそれでも後退しながらビームを撃つが躲され、装甲やファイ

ルドに弾かれてしまい、敵の突撃を受けてしまいあっけなく爆散してしまう。

しかし、突撃を仕掛けた敵MSは煙の中から無傷で現れ、素早くMS形態に変形したあと、次々と連邦軍機をビームや粒子砲で一方的に蹂躪していった。

この様子を艦で見っていたリントは顔面蒼白だった。何せ相手に差し向けた地球連邦軍の最新鋭機ジnkスⅡ（ジnkスⅢがあと少しで配備される予定なので最新鋭の名はあと少しで経てば返上されるが）の部隊を、ほぼ全滅させられてしまったのだ。それもたった一機のMSによる襲撃で。地球連邦軍の機体は徐々に疑似太陽炉搭載型に更新されつつあるが、地球連邦軍の規模に比べて配備は完全ではない。その貴重な機体をパイロット諸共失ってしまった。ここで敵機を捕獲或いは撃墜し、このテロ事件を解決しなければ左遷させるのは確実だ。いや、それどころか最悪銃殺刑に処せられるかもしれない。

「弾幕を張るのです！ 何としてでも作業をしている部隊に近寄らせてはなりません！ そして、敵の正体を掴み排除しなさい！」

『りよ、了解！』

パイロットは敵の強さを見て一瞬「無茶言うな！」と怒鳴り返しそうになったが、それを何とか呑み込み、敵機に攻撃を行った。

地球連邦軍はその後も必死になってデブリ排除と敵機追撃を行ったが、連邦軍を襲撃してきた敵機は、その機動性と運動性能を活かして、連邦軍に損害を与え続けた。連邦軍機からその都度悲鳴に似た絶叫が艦のCICに届き、CICの士官達は啞然とする。そして、しばらく経った後目的を達成したのか、急に方向転換して戦場を離脱していった。

無論連邦軍も追ったが、敵機はあっさりと追撃を振り切り逃走していった。デブリはその後援軍で駆けつけた連邦軍によって無事に取り除かれたが、連邦軍の被害も甚大であった。おまけに飛散したデブリがオービタルリングを覆い、発電が一時できなくなりかなりの経済的損失になった。しかし、最悪の状態を回避できたので、各国関係者は慌てて混乱に対処することになった。

しかし、ルルーシユは色々手を回したのに、結局エネルギーテロは防ぐことができず、事件に迅速に対応する為アロウズ結成は確実となった結果に対して頭を抱えるのであった。おまけに、強奪された機体で妨害してきた者の行方は掴めず、連邦軍は捜査を打切り事件は迷宮入りした。しかし、ルルーシユが念の為に派遣したマユ・アスカにより強奪されたZガンダムは回収されたと報告が入り、ルルーシユは最悪の事態を回避できたことに、ほっとするのであった。

ルルーシユはニューヨークにある超高級ホテルのレストランにいた。目的は前々から約束していたユーフェミアとの食事をする約束を果たすためだ。無論貸し切りだ。ちなみに空いている席には、買い物に付き合わせられ買い込んだ、ユーフェミアの荷物が鎮座していた。

「ルルーシユ。この御料理とてもおいしいですね」

「ああ。そうだねユフィ」

普通ならこのような時間を取ることはスケジュールの関係で難しかった。先月起こったエネルギーテロの後始末と、回収されたZガンダムの運用データから、新型機を製作に関する会議で忙しく、とてもではないが私的な時間を取ることは難しかった。

しかし、ユーフェミアの機嫌が危険域に達していると、姉であるコーネリアから報告を受けてしまい、このままでは、突拍子もないことを仕出かすかもしれないと言われ、貴重な休日を潰して何とか時間を確保した。

（たまには一人でゆっくりしたいな……）

ルルーシユは胸の内でそう呟いた。しかし、それは叶わぬ願いであった。

今回ユーファミアの為に時間を取った為に、仕事のスケジュールを変更した結果、モニカを始めとして自分の私的な部下達を慰労するために、前々から計画していた慰安旅行を欠席する羽目になったのだ。そして、己の休憩時間はさらに減ってしまった。

「（やはり、何としてでも自分だけの国を作らねばならないな……）

「ルルーシユ？ 私の話を聞いているのですか？」っ！ 無論聞いているよ」

ユーフェミアは意識が思考の海に沈んでいたルルーシユを戻す為に、少し拗ねた声をかけた。そして、話を案の定聞いていなかったルルーシユを綺麗な瞳を少し潤ませて見つめた。

「ルルーシユ！ 今日は仕事のことは忘れてください！ せっかく久しぶりに時間を取れたのにこれでは楽しくありませんか！」

ユーフェミアの剣幕にルルーシユは驚いた。

ルルーシユはユーフェミアの言うことに、何も言い返せず沈黙してしまふ。

「……確かにそうだな。今日は久しぶりの兄妹での団欒を優先するよ」

ルルーシユの返答にユーフェミアは満足したのか、食事を再開する。

この後ルルーシユは、ユーフェミアのお喋りに付き合わされるのであつた。

ルルーシユは疲れて眠たそうなユーフェミアを、彼女の迎えに来た護衛へと預け、自分の迎いの車に乗り込みユーフェミアと別れた。

ルルーシユはそのまま、自室へと戻り明日のスケジュール等の確認を行い、シャワーを浴びた後すぐにベッドへと潜り込むのであつた。

## 第十九話 地球連邦本部での一幕

ルルーシユは自社の自室で、マユと共に彼女が撮影した前回の戦闘映像を見ていた。

エネルギーテロを起こしたと思われる人物が操る敵機を押さえこんだのは、ルルーシユが派遣したマユだった。彼女の働きにより奪われた試作機を取り戻すことができたので、ルルーシユの面子は一応保たれ、地球連邦政府への影響力低下は避けられた。

マユの乗機ノワールデステニー・インパルスガンダムと、強奪されたZガンダムの戦闘は激しさを増していく。しかし、Zガンダムの活動が戦闘の最中に低下し始めた。どうやら粒子残量が少なくなっただけでなく、相手はこれ以上の戦闘をするのは無理だと判断したのか、敵は突如Zガンダムから離脱し予め用意していた別のMSに乗り換えて逃走した。

「まさか、フェレシユテを追い詰める策が裏目に出るとは思わなかった」

「すみません。これも私達があの時逃亡を許したせいです」

「いや。これは俺のミスだ。お前が責任を感じる必要はない」

ルルーシユは申し訳なさそうにするマユに対して、今回のイレギュラーは自分の責任だと言い落ち込む彼女を励ました。

ルルーシユは再世戦争が起こるまでに、ソレスタルビーイングの力をできるだけ弱体化させる工作を行っていたのだ。ルルーシユの工作に加え、リボンスの指示を受けた地球連邦が行った工作の前にヴェーダを失ったソレスタルビーイングは対抗することもできず、次々と秘密拠点や協力者を失うことになった。その中にはソレスタルビーイング支援組織フェレシユテも含まれており、最優先目的の一つに入っていた。だが、こちらの部隊の追撃を彼らは振り切り行方をくらましてしまっていた。

連邦軍はこれ以上の搜索を時間の無駄だと結論して、搜索を打ち切ってしまった。ルルーシユは無論続けるように説得したが、これほど叩けば復活等ありえないだろうと一笑して取り合わなかった。最



も今回の結果から、ルルーシユの意見が正しかったことが証明されてその者達は責任を取らされて出世が遅れることになった。

「それよりも、機体の方はどうだ？」

「はい。前の機体よりも手に馴染みます。ルルーシユ様」

ルルーシユは彼女を落ち込ませない為に、話題を変えることにした。

それに対して、マユはルルーシユの気遣いが嬉しかったのか笑顔で答える。

「これならお前専用の機体を製造するためのデータも取れるだろう。報告書を軍に提出したら明日から三日間は休暇を取ってもいいそうだから、羽を伸ばしてくるがいい」

「はい。ありがとうございます！」

マユは休暇と聞いて喜んだ。何せ最近は軍の仕事で忙しく、まともな休みを貰っていなかったのだ。

彼女の喜びようを見て、連邦本部に掛け合ったかいがあつたなどルルーシユも思った。

「久しぶりの休暇を楽しんでくるがいい」

「イエス・ユア・マイロード」

マユが部屋から退出した後、ルルーシユはこの後、地球連邦の仕事を処理する為、ニューヨークにある地球連邦本部に向かった。

ニューヨーク。地球連邦本部が設置されているこの都市は、地球連邦本部が設置される前から世界随一の金融都市して栄えていた。

その地球連邦本部で二人の皇族がある一件で話し合いを行っていた。

「お兄様！ どうして私の要望が通らないのですか!？」

「まあ、落ちきなさい。マリーベル。淑女がそう大声を出すものじゃない」

ブリタニア・ユニオン宰相兼地球連邦議会議長を務めるシユナイゼ

ル・エル・ブリタニアは、最近皇族に復帰した妹マリーベルを落ち着かせるべく柔らかな声音で接していた。

「っ！……すみません。つい熱くなつてしまいました……」

「大丈夫。君の気持ちは理解している」

「なら、どうして未だに動きがないのですか？　すでに皇帝陛下の許可は頂きました。人員も各方面に声をかけて順調に集まっていますのに、未だに部隊編成を行う為の予算が下りないなんて……」

マリーベルの言うことに、シュナイゼルは思わず苦笑した。

厳しい訓練を受けて世間の荒波に揉まれて大人の対応を取れるはずの妹だが、どうやらまだまだ根っこの部分は子供らしい。

「マリーベル。確かに皇帝陛下の許可は下りた。しかし、それだけでは部隊設立はできないのだよ。地球連邦はブリタニア・ユニオンだけで構成されているわけではない。それに対テロ特殊部隊は今度新たに設立される治安維持部隊が担うことになるから、君の望みは叶うのではないかね？」

マリーベルは皇族に復帰したその原動力は、自分の家族を殺したテロリズムを殲滅すること。その為彼女はテロを掃討する特殊部隊を設立することを望んでおり、彼女はそれを実現する為各方面に根回しを行っていた。その中に自国の宰相であり、地球連邦でも影響力を持つシュナイゼルも入っていた。彼女は部隊設立の書類を送り、彼に設立許可が下りるようにお願いした。

しかし、許可は下りたものの部隊設立に必要な予算がちつとも下りず、未だに騎士達の乗るKMFすら調達できずにいた。一応目星をつけている機体はあるのだが、自分の騎士用にカスタムしてもらう必要がある、その整備も含めた人員を確保する必要があるので予算は必須だったのだ。その為、未だにKMFのデヴァイサーしか決まっておらず、彼女の騎士団は名ばかりのハリボテ部隊と断言していい有り様だった。

シュナイゼルはこの妹の必死な行動に対して、どう回答すればいいか熟考していた。

彼は地球連邦の官僚から、これ以上仕事を増やさないと頼ま

れていた。おまけにアロウズ設立が決まった時点で、このような部隊は指揮系統を乱す可能性があると言われ軍からも反対されていた。

おまけに財務官僚からこれ以上の予算を出すことは無理だときっぱりと言われてしまい、新たな部隊を作るのなら私費を投じるしかなかった。

シユナイゼルとしては、自分の計画の為に建設しているダモクレス要塞に金を注ぎ込んでいるの最中なので、正直己の懐もあまり余裕はなかった。

(ここは彼女にルルーシユの元に行くよう誘導しよう。予算が出るか出ないかは彼が判断することだしね)

シユナイゼルは目の前にいる妹の対応を、ルルーシユへ丸投げすることにした。彼の恨みを買うことになるかもしれないがマリーベルを説得するのは難しいし、自分もあまり余裕はないので資金援助をすることは不可能なのでそう返答することにした。もし、ルルーシユが文句を言ってきたら何とか受け流すつもりだ。

「ルルーシユに相談してみてもはどうだろうか？ ルルーシユの資金力は相当な物だし、彼は連邦の財務長官。部隊の予算を得るには協力は不可欠だろう」

「それはそうですが……」

シユナイゼルは画してマリーベルに、ルルーシユへ直談判してきてはどうかと薦める。

マリーベルはそれを聞いて、何ともいえない微妙な顔をした。今まで自分の騎士団設立に難色を示していたルルーシユが、自分の願いを聞き入れる可能性はかなり低かった。しかし、シユナイゼルお得意の話術でその気になったマリーベルは、最終的にシユナイゼルの言う通り、ルルーシユの元へ向かうことにしたのであった。

一方、シユナイゼルが面倒事を押し付けようと画策していることに気付いていないルルーシユは、今日も割り当てられた部屋で書類と格闘していた。

「忙しすぎる……このままでは、今日も家に帰れないかもしれない」

処理して処理しても減らない書類の山を見て、死んだ魚の目になっている。財務部だけではなく、軍部関係の部署も書類作業している役員達大体同じような状態だったが、ルルーシユの忙しさは特に群を抜いていた。

（まだ、二十歳にもなっていないのに、過労死させるきか！）

面倒事を押し付けて高みの見物をしているリボンス等に対して、殺意が湧いてくる。

唯でさえ、各部署の予算を細かく割り振る為に、各部署との調整や根回しで忙しいのに、ここに来て新部隊の設立。

（おまけに自分専用機とイノベーター専用機を作る為の予算を捻り出せだと……。ふざけやがって！）

極めつけは予算分配に苦労しているのに金の要求。そして、俺が断れない様に、地球連邦大統領の命令書まで出してきやがった。

あのイノベーターもどきめ……。今は大事なお得意様だから我慢してやるが、必ずこのツケは何百倍にして返してやる。

（ソレスタルビーイング号の位置は常に把握している……。次の再世戦争で大義名分ができれば、もしもの時の為に作っておいた、例の兵器でまとめて消滅させてくれる）

頭の中でリボンスに対して恨み言を呟きながら今日も書類を処理していくのであった。さっさと終わらせて休暇を取る為と自分に言い聞かせながら。

最もこの後、やって来る人物によって彼の悩みと仕事は増えるはめになるので、望んでいた休暇は随分先になるのであった。